2023 年度　シンポジウム報告書

コロナ禍を通した主体的・探究的な学びの変化と今

―東大附属中等教育学校における新たな取り組みとその効果―

東京大学大学院教育学研究科附属

学校教育高度化・効果検証センター

2023 年 12 月 24 日（日）

10:00～12:30

オンライン（Zoom）

による開催

CASEER

シンポジウム

コロナ禍を通した
主体的・探究的な学びの変化と今

―東大附属中等教育学校における新たな取り組みとその効果―

報　告　書

2023 年 12 月 24 日

於　Zoom によるオンライン開催

東京大学大学院教育学研究科附属学校教育高度化・効果検証センター

目次

シンポジウム：コロナ禍を通した主体的・探究的な学びの変化と今
—東大附属中等教育学校における新たな取り組みとその効果—

開会・プログラム紹介……北村 友人　2
開会挨拶……勝野 正章・山本義春　3

第Ⅰ部　コロナ禍の影響を紐解く

「東大附属パネル調査のデータから見えてくるもの」……日高 一郎　4
「コロナ生活が東大附属生の学習姿勢・自己肯定感に与えた影響」……発田 志音　10
質疑応答……14

第Ⅱ部　コロナ禍での学びの変化

コロナ禍における附属学校の状況
「関わりをいかに保障するのか～東大附属の学びとコロナ禍～」……浅川 俊彦　19
座談会　生徒と教師と語り明かす学びの変化……
大井 和彦・野々村 まこ・髙濱 真帰・永利 美彩・北村 友人　29

閉会挨拶……北村 友人　40

シンポジウム「コロナ禍を通した主体的・探究的な学びの変化と今
―東大附属中等教育学校における新たな取り組みとその効果―」

2023 年 12 月 24 日（日）10:00～12:30
オンライン（Zoom）

開会・プログラム紹介

北村　友人（CASEER センター長・教育学研究科教授）

本日は、東京大学大学院教育学研究科附属学校教育高度化・効果検証センターと東京大学教育学部附属中等教育学校の共催シンポジウム、「コロナ禍を通した主体的・探究的な学びの変化と今」にご参加いただき、誠にありがとうございます。私は学校教育高度化・効果検証センター（CASEER）のセンター長を務めております東京大学の北村と申します。本日の総合司会を務めさせていただきます。本シンポジウムは、東京大学高大接続研究開発センターの後援を頂いています。

本日のシンポジウムは、コロナ禍という大きな危機による主体的・探究的な学びの変化を、そういった学びの在り方を重視している東大附属を事例として、皆さまと一緒に考える時間にできればと思っています。

第Ⅰ部では、CASEER の特任講師である日高先生から、東大附属で行っている調査のデータから見える状況を説明していただく予定です。また、CASEER で行っている研究の成果を共有したいと考えています。第Ⅱ部では、先生と生徒の皆さんと一緒に当時を振り返り、これからの学びの在り方について考えられればと思っています。

開会挨拶

勝野　正章（教育学部長・教育学研究科研究科長）

おはようございます。本日は年末の日曜日という慌ただしい時期にもかかわらず、多くの皆さまにご参加いただき、誠にありがとうございます。

東京大学教育学部附属中等教育学校では、総合的な学習のみならず、教科でも探究的・協働的な学びを保障し、さらに学校行事や部活動などの自主的・自治的活動を通して、生徒の豊かな市民性を育む教育を実践しています。

学校教育高度化・効果検証センターは、こうした特徴ある東大附属における学びの成果を、在学時だけでなく、生涯という長い視野で縦断的に捉えることを目的にしたパネル調査を実施しており、その調査研究の知見を広く共有し検討を深めることを目的に、毎年こうしたシンポジウムを開催しています。

今回のシンポジウムは、2020 年 2 月末から 6 月までの全国一斉休校期間を挟み、長期間にわたってコロナ禍への対応が求められる中での、東大附属の学びの変化をテーマとしています。パネル調査の分析に加え、在校生の皆さんが自身の言葉で語る内容で構成しています。コロナ禍による直接的な関わり合いの制限が、探究的・協働的な学びや自主的・自治的活動に多くの困難をもたらしたものと思いますが、そうした状況の中から新たな学びや実践の可能性も見えてきたのではないかと思っています。

過日公表された OECD の PISA2022 の結果では、日本は多くの他の国々と比較して、コロナ禍による教育への負の影響は少ない、いわれるレジリエントな国の一つであるとされました。その理由として、休校期間の短さが挙げられていますが、本日のシンポジウムは、学校教育のそうした時間的・量的側面にとどまらず、コロナ禍において実際に何が起こっていたのか、その影響はどのようなものなのかということの検討を通して、これからの教育の展望を共に考え合う機会にできればと願っています。本日はどうぞよろしくお願いします。

山本　義春（教育学部附属中等教育学校校長・教育学研究科教授）

おはようございます。学校長の山本です。この 3 年余り、私も含め、本日ご参加の皆さんは、これまでに体験したことのないような多くの出来事を体験してきたことと思います。

前任の斎藤校長は、2020 年 4 月の着任時に新型コロナウイルスのパンデミックが始まり、後ほどご登場される淺川副校長と共に大変な諸対応を迫られたことと思います。私の場合、来年 3 月までの任期がコロナ禍の 4 年目で、3 年目のときには新型コロナウイルスの感染症法上の位置付けが 5 類へ移行したこともあり、学校生活や社会生活が少しずつコロナ禍前に戻っていく様子を、ある程度落ち着いて観察することができました。

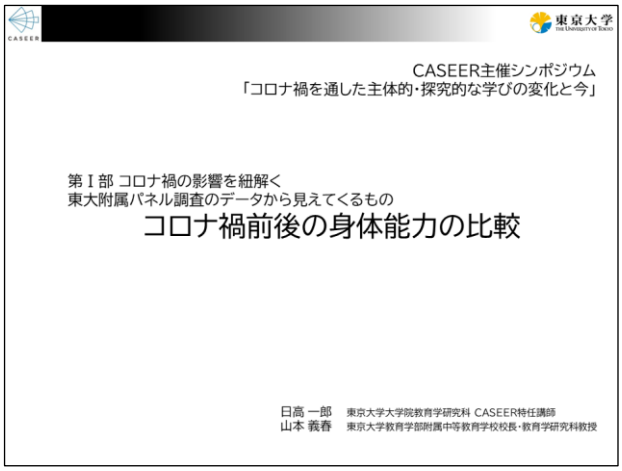
その過程で感じたのが、コロナ禍が教育現場に与えたさまざまな影響は多様な時間スケールで立ち現れるということです。本年 2 月に開催された前年度の CASEER のシンポジウムでも触れましたが、初期の緊急対応が落ち着き、体調不良による保健室の来室者数が増加し始めたのは、1 年以上たった 2021 年の秋以降でした。後ほど日高先生にもご紹介いただきますが、活動が制限されたことによると思われる生徒の体力低下は、今でも観察できます。いまだにオンラインでの集会、会議、シンポジウムが行われていますが、それなりに便利な面もあり、果たして元に戻るかも怪しいと言えます。すなわち、コロナの影響は、良しあしは別にしてまだまだ残り続けます。

学校、社会、そして世界に未曾有の変化をもたらしたコロナ禍の影響を、さまざまな観点から話し合い、記録に残すこと、本日のシンポジウムが、そのことを通じて、学校や教育についてより深く考える契機になること、また場合によっては、対応を考える契機になることを祈念し、開会の挨拶とさせていただきます。

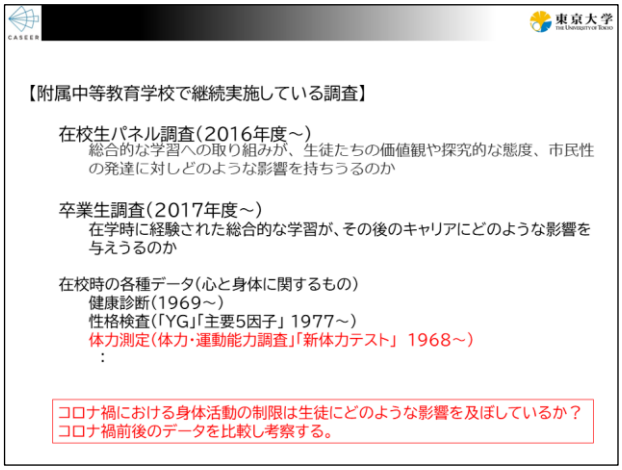
第Ⅰ部　コロナ禍の影響を紐解く

「東大附属パネル調査のデータから見えてくるもの」

日高　一郎（CASEER 特任講師）



東大附属では、パネル調査という形で継続実施している調査が幾つかあります（Slide 1）。一つは在校生パネル調査です。こちらは総合的な学習への取り組みが、生徒たちの価値観や探究的な態度、市民性の発達に対して持ち得る影響を調べています。もう一つは卒業生調査です。こちらは、在学時に経験した総合的な学習がその後のキャリアに与え得る影響を調べています。

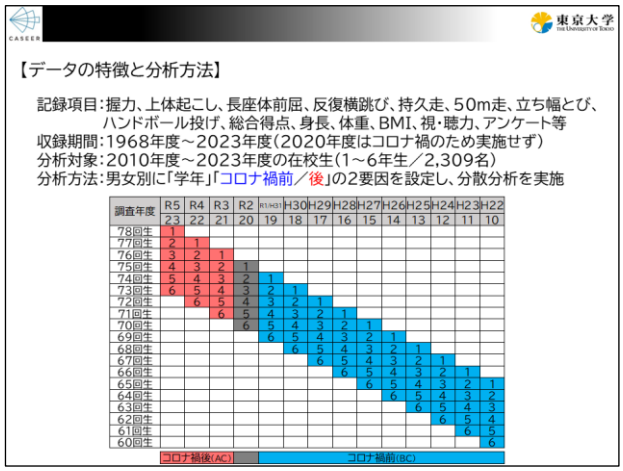


Slide 1

在校生調査ではコロナ禍の影響に関するデータが徐々に出てきています。在校生パネル調査以外に、心と体に関して同様にパネル的な調査として健康診断や性格検査などを行っていますが、本日はその中から、体力測定のデータを紹介したいと思います。つまり、コロナ禍における身体活動の制限が生徒に及ぼしてきた影響を、コロナ禍の前後のデータを比較して考察したいと思います。

1. データの特徴と分析方法

今回紹介するデータの記録項目は、握力、上体起こし、長座体前屈、反復横跳び、持久走、50m 走、立ち幅跳び、ハンドボール投げ、これらの総合得点、身長、体重、BMI、視・聴力、スポーツに対するアンケート、さらに虫歯についても含まれていますが、本日は体力系のデータと身長・体重のみを分析したいと思います（Slide 2）。



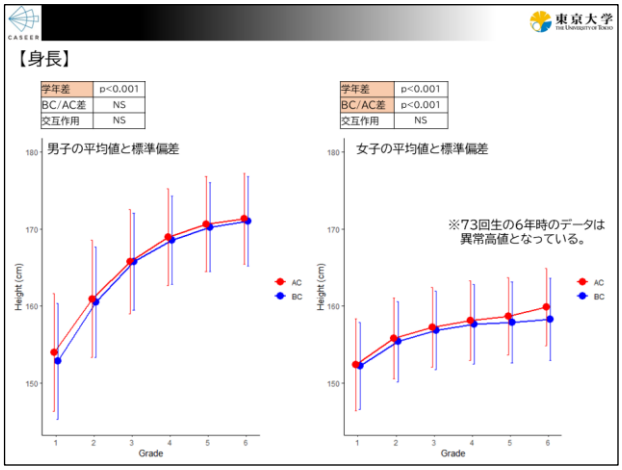
Slide 2

データ自体は 1968 年度から 2023 度まで、非常に長い時間収録しています。ただ、2019 年 12 月ごろからパンデミックが始まった影響で、2020 年度は調査ができなかったので、この年度だけはブランクになっています。その後、2021 年度、2022 年度、2023 年度は全学年で調査ができているので、その 3 年間のデータをコロナ禍後（AC）とし、2020 年度より前の 10 年間をコロナ禍前（BC）として、比較を行いたいと思います。

分析方法としては、男女別に「学年」「コロナ禍前／後」の 2 要因を設定し、分散分析と多重比較を実施しています。

2. データ分析

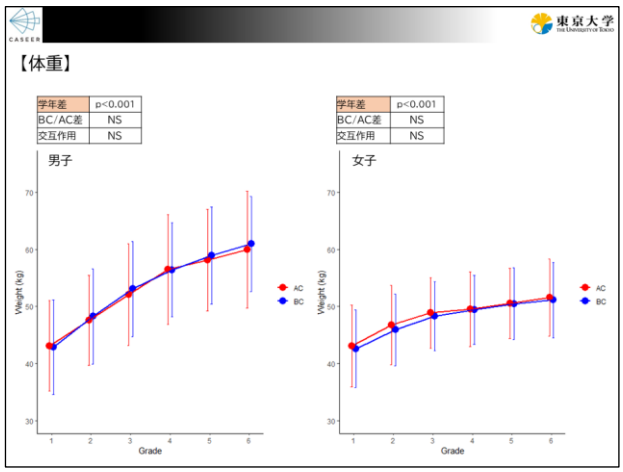
それでは、一つ一つのデータを見ていきたいと思います。Slide 3 のグラフは、横軸が学年です。東大附属は、中学 1 年生、2 年生、3 年生、高校 1 年生、2 年生、3 年生という構成になっており、グラフでは 1～6 年となっています。縦軸は測定項目の値で、左が男子、右が女子です。折れ線グラフは、青がコロナ禍前、赤がコロナ禍後です。



Slide 3

まず男子は、発育のスパートという現象が中学生の頃によく見られ、コロナ禍の前後ともに非常に身長が伸びています。その後、高校生になって年齢が進むにつれて、身長の伸びは落ち着くという典型的なカーブを示しています。学年差ではもちろん有意差がありましたが、コロナ禍の前後では差がありませんでした。女子についても、同じように成長スパートとその後の停滞期が見られ、学年差もあるのですが、女子についてはなぜかコロナ禍の前後で差がありました。子細に見ていくと、73 回生の 6 年次のデータだけが以上な高値になっていました。通常はこの年代で身長は伸びないので、恐らく機材の不調や測定条件の不備があり、そのためにデータが上昇しているのではないかと考えています。後ほど参考資料として、73 回生の 6 年次のデータを提示したいと思います。

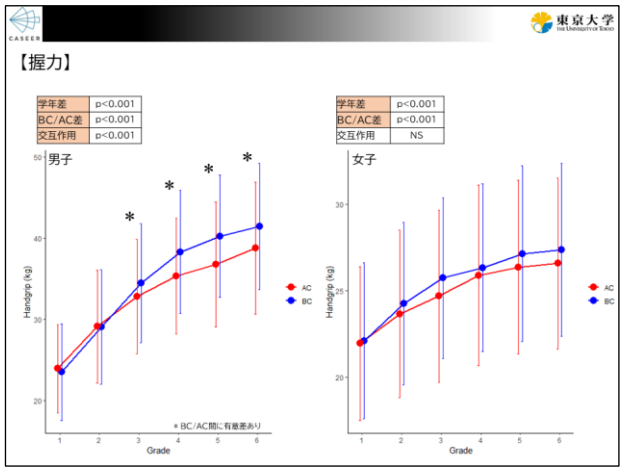
次に体重です（Slide 4）。男子はコロナ禍の前後で差はありませんでした。女子についても、コロナ禍の前後で差はありませんでした。



Slide 4

ということで、身長と体重に関しては、コロナ禍の前後で目立った変化は見られませんでした。ただ、これはあくまでも見かけです。見かけ上はコロナ禍の前後で生徒の状態が変わっていないと思うかもしれませんが、実際のところ、身体能力という観点からは非常に大きな差が出ていますので、それをこの後紹介したいと思います。

まず握力です（Slide 5）。握力は男子・女子ともコロナ禍の前後で差があり、男子では交互作用が見られました。

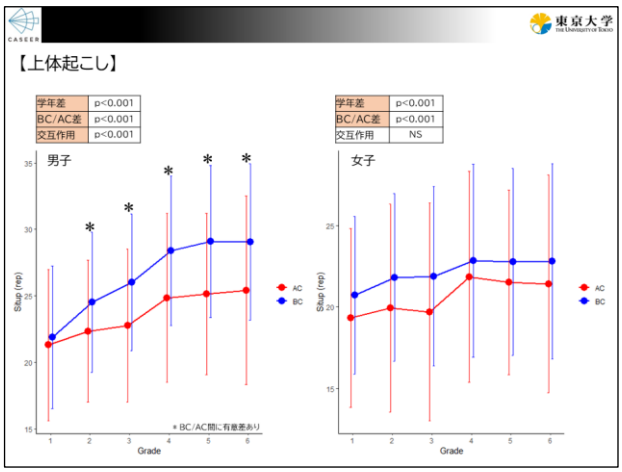


Slide 5

男子は、学年が進むにつれて上昇していきますが、3～6 年次でコロナ禍の前後でかなり大きな差が出ています。どのぐらい大きな差かというと、コロナ禍後の 6 年生の平均値がコロナ禍前の 4 年生の握力と同じなのです。2 学年下と同等のレベルまでしか伸びておらず、非常に大きな影響があると考えてい

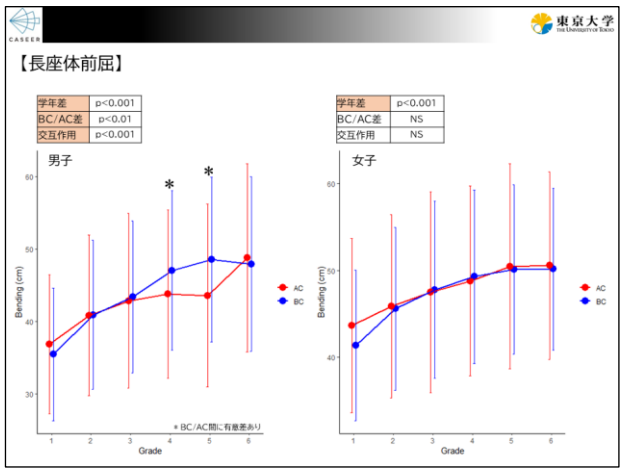
ます。女子は交互作用がありませんでしたが、全体として、やはりコロナ禍後の方がコロナ禍前よりも握力が低下しており、2 学年下のレベルまで下がっていると考えてよいかと思います。

握力は末梢の筋力を測っていますが、次は上体起こしです（Slide 6）。こちらは体幹部の筋力を見ていると考えています。こちらもコロナ禍の前後で統計的に有意な差が出ており、特に男子で非常に大きな差が出ています。一定時間内の上体起こしの回数で見ているのですが、コロナ禍後の 6 年生は、コロナ禍前の 2 年生と同レベルの回数しかできていません。ですから、特に体幹系の筋力低下は著しいものがあると考えています。女子については、1 年生の時点から差があります。この調査は毎年 5 月ごろに実施しているため、1 年生のデータは入学前の状況をある程度反映していると考えられるのですが、この差が学年が進んでも埋まることなく、ずっと平行移動で続いていきます。



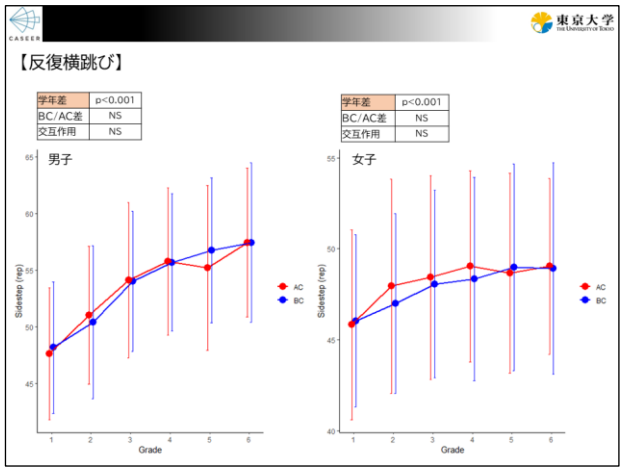
Slide 6

次は長座体前屈です（Slide 7）。柔軟性の指標ですが、女子はコロナ禍の前後で差はありませんでした。男子については、4 年生と 5 年生が、コロナ禍前に比べてコロナ禍後では柔軟性が落ちていました。



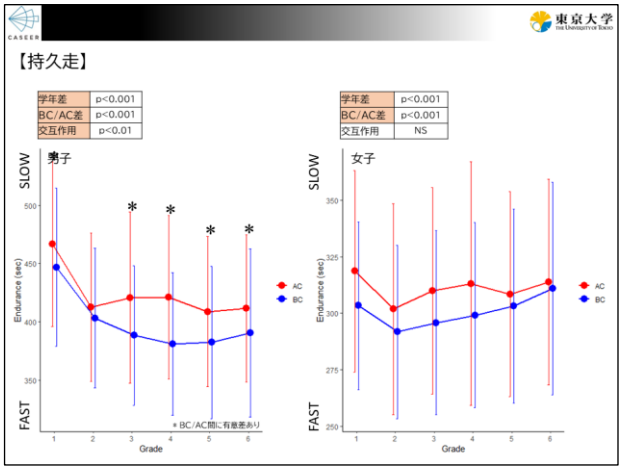
Slide 7

反復横跳びに関しては、コロナ禍の前後で有意な差は見られませんでした（Slide 8）。



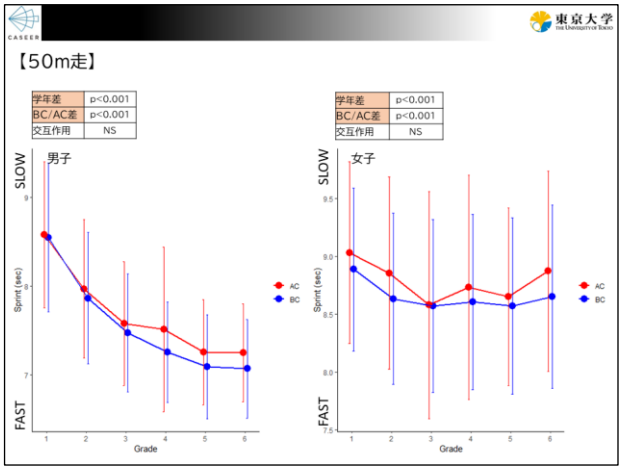
Slide 8

次は持久走です（Slide 9）。男子は 1500m 走の所要時間、女子は 1000m 走の所要時間を見ていますが、どちらもコロナ禍の前後で統計的に有意な差が出ています。例えば男子では、コロナ禍前は学年が進むにつれて所要時間が短くなる、つまり走行スピードが速くなり、4～5 年生でピークになりますが、コロナ禍後は 3～6 年生でほとんどタイムが短縮しないという形で、コロナ禍前と比べて大きな差が出ています。女子については、コロナ禍前よりも後の方が所要時間が伸びている、つまりスピードが遅くなっているという現象が見られました。



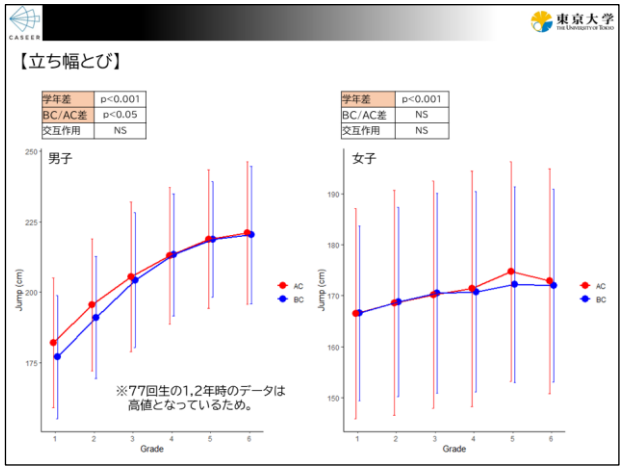
Slide 9

一方、短距離走のタイムはどうなっているかというと、50m 走もやはりコロナ禍の前後で差が出ており、男子・女子ともコロナ禍前より後の方がタイムが悪くなっていました（Slide 10）。



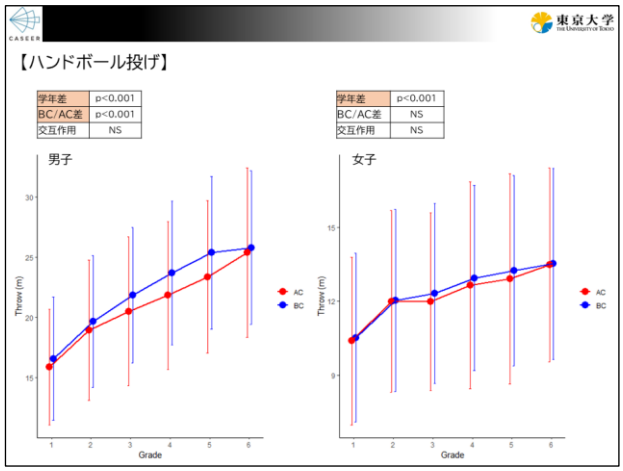
Slide 10

次に立ち幅跳びです（Slide 11）。瞬発力、あるいはジャンプは結構スキルが要される種目なので、体の巧緻性のようなものを表していると思われますが、男子でなぜかコロナ禍後の方が良い値が出ています。これも後で提示しますが、ある一部のデータだけ高値になっているのです。77 回生は 2 回だけ測っている学年なのですが、その 2 回のデータに、他の学年の最大に相当するような値が入っており、その部分で値が引き上げられて差が出ているのではないかと考えます。その部分を除くと差はないように見受けられます。女子についても特に差は見られませんでした。



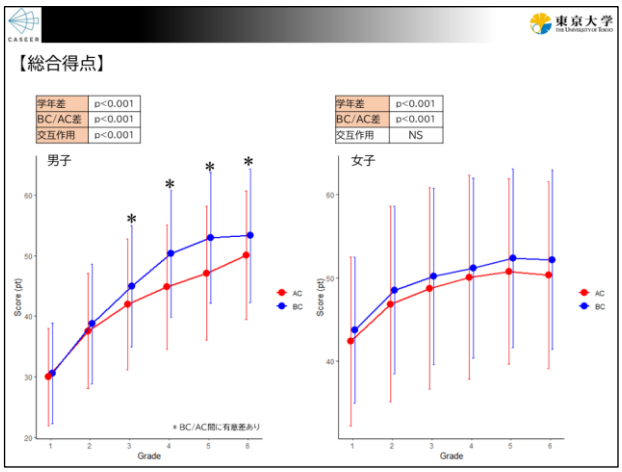
Slide 11

次にハンドボール投げです（Slide 12）。男子については、コロナ禍前よりも後の方が投てき距離が短くなっていました。6 年生のデータは前後でほぼ同じですが、5 年生などのデータは、やはり 2 学年ぐらい下のデータに匹敵する状況になっています。女子については、有意な差は見られませんでした。



Slide 12

これらの身体能力の成績を正規化・スコア化し、全て足し込んだ総合得点を見てみると、男女ともにコロナ禍前よりも後の方が得点が下がっていました（Slide 13）。特に男子については、3～6 年生でスコアの低下が著しいという結果でした。



Slide 13

3. 分析結果のまとめ

以上の分析結果をまとめると、身長、体重といった発育の指標はコロナ禍の前後で特に差は見られませんでしたが、これはあくまでも見かけであり、内実はどうかというと、いろいろな測定項目においてコロナ禍の前後で差が出ていました（Slide 14）。

【分析結果のまとめ】

測定項目	測定内容	BC/AC間の差	
		男子	女子
身長	発育		(*)
体重	発育		
握力	筋力	*	*
上体起こし	体幹の筋力	*	*
長座体前屈	柔軟性	*	
反復横跳び	敏捷性、巧緻性		
持久走	全身持久力	*	*
50m走	瞬発力、敏捷性	*	*
立ち幅とび	瞬発力、敏捷性	*	
ハンドボール投げ	巧緻性、運動経験	*	
総合得点	総合力	*	*

Slide 14

特に握力や上体起こしといった筋力系や、持久走や 50m 走といった走る能力の低下が著しく、立ち幅跳びやハンドボール投げといった瞬発力や敏捷性、巧緻性、運動経験を要するような種目に関しても、特に男子で低下が著しいという結果が出ました。

4. 考察

コロナ禍前後の体力測定データの比較を行ったところ、身長、体重については顕著な変化は見られませんでした（Slide 15）。つまり、見た目では変化なしなのですが、一方で、筋力や筋持久力、全身持久力といった基本的な身体能力は大きく低下しています。特に体幹の筋力や全身持久力は、コロナ禍前の 4 学年下の生徒と同じレベルぐらいにまで落ちており、非常に危機的な状況であると考えています。

【考察】

- コロナ禍前後の体力測定データの比較を行ったところ、身長、体重については顕著な変化は見られない（見た目では変化なし）。
- しかしながら、筋力、筋持久力、全身持久力といった基本的な身体能力は明らかに低下している。
- とくに体幹の筋力や全身持久力はコロナ禍前の数学年下の学年と同様のレベルとなっており、危機的な状況であると考える。また、コロナ禍前の同学年で行っていた授業は、コロナ禍後の生徒にとっては遂行が難しくなっていると予想される。
- 入学直後から差が見られるものとしては、持久走、女子の上体起こしなどがあり、これらの差の一部については時代性を表している可能性もあるが、多くの項目では入学後、学年が進むにつれてコロナ禍前との差が大きくなっており、コロナ禍における運動制限や生活様式の変容を反映した結果であると思われる。
- コロナ禍における体力低下の影響がいつまで継続するのか、また積極的な介入によってどの程度回復するのか、調査・検討が必要である。

Slide 15

世の中は徐々にコロナ禍前の状況に戻りつつあります。教育内容に関しても、コロナ禍前と同じことができるだろうと考えてしまいがちですが、要求される体力レベルを考えると、コロナ禍前の同じ学年で行っていた授業は、実は非常にきつい授業になっているのではないかということが示唆されます。もしかしたら、これがけがにもつながっているかもしれません。

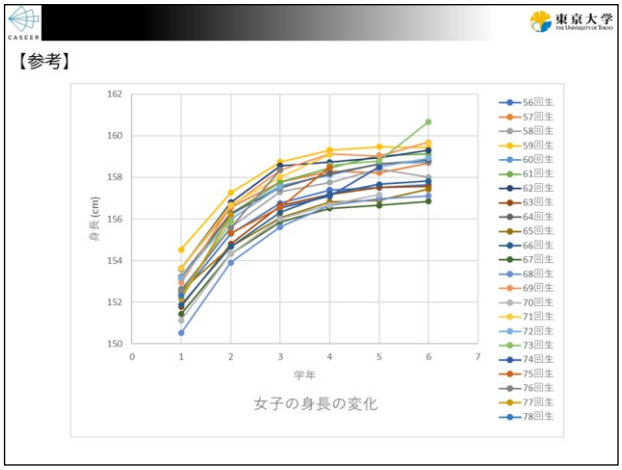
入学直後から差が見られるものの一部については時代性を表している可能性もありますが、他の多くの項目では、入学後に学年が進むにつれてコロナ禍前との差が大きくなっており、恐らくはこれらの項目に関しても、コロナ禍における運動制限や生活様式の変容を反映した結果であると考えています。

このような体力の低下が一体いつまで継続するのか、また、今後われわれが積極的に介入することによってどの程度回復するのかということに関しては、今後も調査・検討が必要であると考えています。

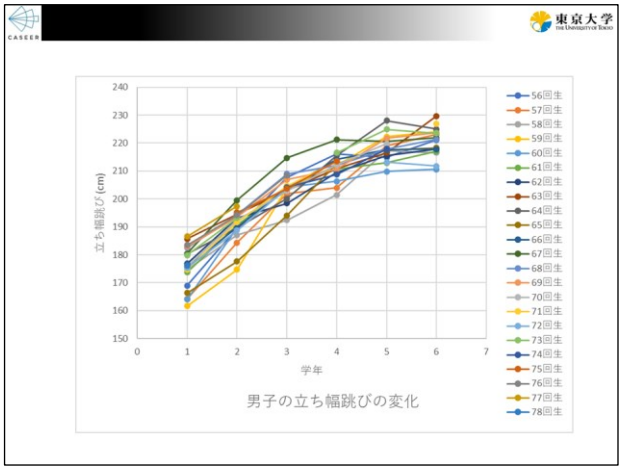
5. 参考

Slide 16 は、女子の身長が 73 回生の 6 年次だけ非

常に大きいというデータです。これが分析に悪さをしています。それから Slide17 は、男子の立ち幅跳びで 2 回だけ測定している 77 回生が非常に高値になっているというデータです。



Slide 16



Slide 17

コメント

（北村）　日高先生、ありがとうございました。コロナ禍の影響について、学力への影響はこれまでも議論されてきましたが、今回は身体面への影響ということで、子どもたちの生活の在り方だけではなく、けがに結びつかないような授業の在り方といった、今まで考えが及んでいなかったかもしれないところまで、データを通してかなり正確に考察していただいたと思います。

ただ今の日高先生からの報告に対して、コメンテーターとして、学校長の山本先生からコメントをお願いできればと思います。

（山本）　開会の挨拶の際、保健室の来室者数が増え始めたのが、パンデミックが始まって 1 年半ほどたった 2021 年の秋口と申し上げました。当時、養護教諭の先生方に聞いたところ、多くは内科的な愁訴、つまり体調不良を訴えて来室する生徒が多かったそうです。

一方で、今年（2023 年）4 月に養護教諭の先生に伺ったところ、今年は外科的な原因、つまりけがでの来室が増えていると伺いました。細矢副校長も先日「最近けがが多くなった」と述べられていました。本日、日高先生の発表を聞いて、その原因の一端が分かったような気がします。

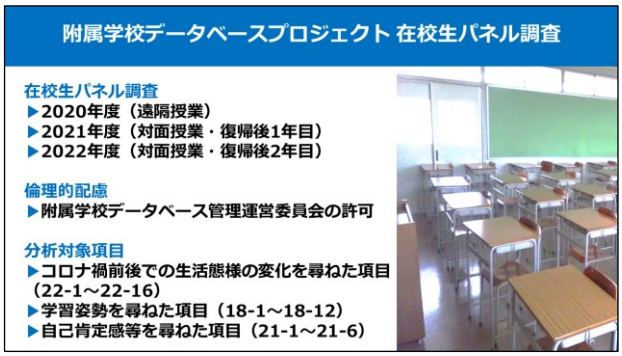
問題は、このまま何もしないでよいのかということだと思います。私としては、体育の授業内容を工夫するぐらいしか思い浮かばないのですが、後ほどディスカッションの中で皆さんからもアイデアを伺いたいと思っています。

ここまでは体の話でしたが、事前の連絡では、コロナ禍が学習に与えた影響に興味がある方もいましたので、第 I 部の残りの時間で、コロナ禍やオンライン授業が学びに与えた影響について、在校生のパネル調査から見えてくるものを CASEER 協力研究員の発田さんから紹介していただきます。

「コロナ生活が東大附属生の学習姿勢・自己肯定感に与えた影響」

発田　志音（CASEER 協力研究員）

私からは、コロナ禍において実施されたオンライン授業に伴う生活の変化が、東大附属生の学習姿勢や自己肯定感に与えた影響に関する分析結果を紹介します。本研究では、附属学校データベースプロジェクトで調査された在校生パネル調査のデータを使用しました（Slide 1）。

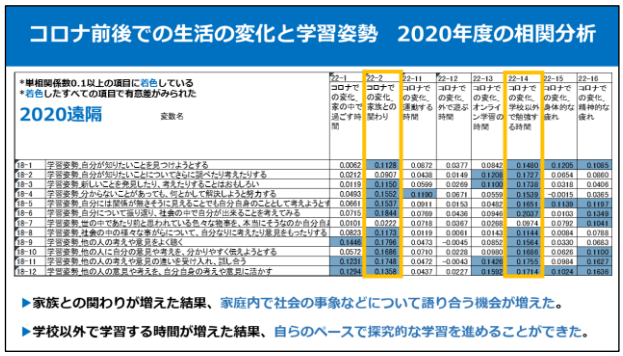


Slide 1

1. コロナ禍前後の生活変化と学習姿勢（2020 年度の相関分析）

まず、コロナ禍前後での生活の変化を尋ねた項目と学習姿勢を尋ねた項目の関連を見る相関分析の結果を取り上げます。

2020 年度の調査の時点では、東大附属では、コロナ禍によるオンライン授業が全面的に実施されていました。Slide 2 は、単相関係数が 0.1 以上、すなわち一定の相関が見られた項目を青色で着色しています。着色された項目の全てで有意水準 5%の有意差が認められました。



コロナ前後での生活の変化と学習姿勢　2020年度の相関分析

*単相関係数0.1以上の項目に着色している
*着色したすべての項目で有意差がみられた

2020遠隔

	変数名	22-1 コロナで の変化、家の中で過ごす時間	22-2 コロナで の変化、家族との関わり	22-11 コロナで の変化、運動する時間	22-12 コロナで の変化、外で過ふす時間	22-13 コロナで の変化、オンライン学習の時間	22-14 コロナで の変化、学校以外で勉強する時間	22-15 コロナで の変化、身体的な疲れ	22-16 コロナで の変化、精神的な疲れ
18-1	学習姿勢 自分が知りたいことを見つけようとする	0.0062	0.1128	0.0872	0.0277	0.0947	0.1403	0.1205	0.1065
18-2	学習姿勢 自分が知りたいことについてさらに調べたり考えたりする	0.0212	0.0907	0.0438	0.0149	0.1208	0.1727	0.0654	0.0860
18-3	学習姿勢 新しいことを発見したり、考えたりすることはおもしろい	0.0119	0.1150	0.0599	0.0269	0.1100	0.1728	0.0318	0.0406
18-4	学習姿勢 分からないことがあっても、何とかして解決しようと努力する	0.0493	0.1552	0.1190	0.0671	0.0559	0.1539	−0.0015	0.0365
18-5	学習姿勢 自分には関係が無さそうに見えることでも自分自身のこととして考えようとする	0.0661	0.1537	0.0911	0.0150	0.0482	0.1651	0.1130	0.1197
18-6	学習姿勢 自分について振り返り、社会の中で自分が出来ることを考えてみる	0.0715	0.1844	0.0769	0.0436	0.0948	0.2037	0.0103	0.1349
18-7	学習姿勢 世の中であたり前と思われている色々な物事を、本当にそうなのか自分自身	0.0101	0.0222	0.0718	0.0367	0.0268	0.0974	0.0792	0.1041
18-8	学習姿勢 社会の中の様々な事がらについて、自分なりに考えたり意見をもったりする	0.0823	0.1172	0.0119	0.0061	0.0143	0.1144	0.0084	0.0788
18-9	学習姿勢 他の人の考えや意見をよく聞く	0.1446	0.1796	0.0473	−0.0045	0.0852	0.1564	0.0330	0.0663
18-10	学習姿勢 他の人に自分の意見や考えを、分かりやすく伝えようとする	0.0572	0.1686	0.0710	0.0228	0.0960	0.1686	0.0626	0.1100
18-11	学習姿勢 他の人の考えや意見の違いを受け入れ、話し合う	0.1294	0.1748	0.0472	−0.0043	0.1428	0.1755	0.0984	0.1627
18-12	学習姿勢 他の人の意見や考えを、自分自身の考えや意見に活かす	0.1294	0.1358	0.0437	0.0227	0.1592	0.1714	0.1024	0.1638

▶家族との関わりが増えた結果、家庭内で社会の事象などについて語り合う機会が増えた。

▶学校以外で学習する時間が増えた結果、自らのペースで探究的な学習を進めることができた。

Slide 2

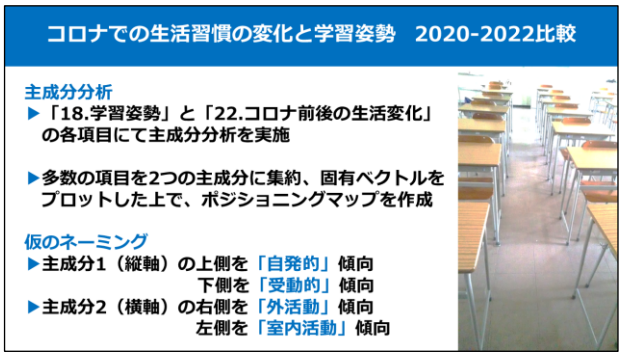
これを見ると、番号 22-2「家族との関わり」と、番号 18 の学習姿勢項目の多くとの間で相関が見られます。これは、コロナ禍のステイホームによって家族との関わりが増えた結果、家族関係が良好な家庭では、むしろ家庭内で社会問題について語り合う機会が増えたものと考えられます。

東大附属は、入学検査の内容との関係でも、親子関係や兄弟関係、特に双子の場合は双子同士の関係性が良好な場合が多いと考えられます。実際にこのことは、番号 22-14「学校以外での学習機会」と番号 18 の学習姿勢項目の多くに相関が見られた点にも現れています。

東大附属生は、自律的に探究学習を進める力が相対的に高く、学校以外で学習する時間が増えた結果、生徒によっては、自らのペースで興味のある学習を進めることができたものと考えられます。

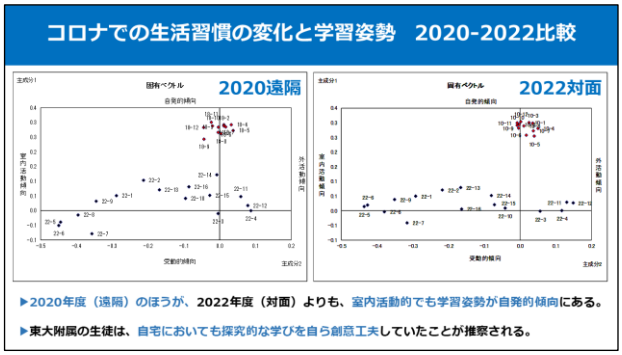
2. コロナ禍前後の生活習慣の変化と学習姿勢（2020 年度および 2022 年度の比較）

これらの結果を可視化するために、オンライン授業であった 2020 年度と、対面授業に復帰後 2 年目の 2022 年度について、学習姿勢の各項目と生活態様の各項目にて主成分分析を行いました（Slide 3）。二つの主成分についてプロットしたポジショニングマップを作成し、プロットされた項目名より、主成分 1（縦軸）の上側を自発的傾向、下側を受動的傾向、主成分 2（横軸）の右側を外活動傾向、左側を室内活動傾向と、それぞれネーミングしました。



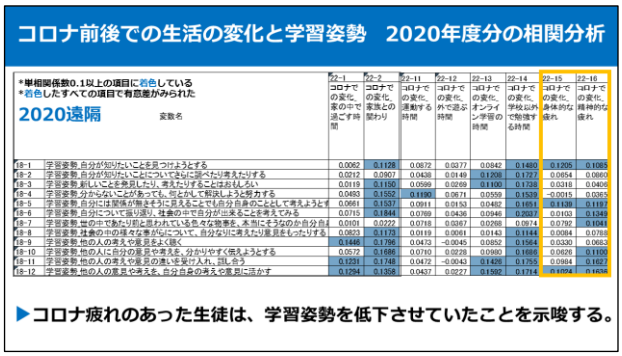
Slide 3

このポジショニングマップを見ると、対面復帰後の 2022 年度よりも 2020 年度の方が、室内活動的であったとしても、学習姿勢の自発的傾向が見受けられます（Slide 4）。この結果からも、やはり東大附属の生徒は、自宅においても探究的な学びを自ら創意工夫して進めていたことが読み取れます。



Slide 4

次に、同じ項目、すなわちコロナ禍前後の生活変化を尋ねた項目と学習姿勢を尋ねた項目の関連を見る相関分析について、オンライン授業であった 2020 年度と対面授業復帰後の 2021 年度および 2022 年度の 3 年間の結果を同時に比較してみました（Slide 5）。



コロナ前後での生活の変化と学習姿勢　2020年度分の相関分析

*単相関係数0.1以上の項目に着色している
*着色したすべての項目で有意差がみられた

2020遠隔

	変数名	22-1 コロナでの変化、家の中で過ごす時間	22-2 コロナでの変化、家族との関わり	22-11 コロナでの変化、運動する時間	22-12 コロナでの変化、外で遊ぶ時間	22-13 コロナでの変化、オンライン学習の時間	22-14 コロナでの変化、学校以外で勉強する時間	22-15 コロナでの変化、身体的な疲れ	22-16 コロナでの変化、精神的な疲れ
18-1	学習姿勢_自分が知りたいことを見つけようとする	0.0062	0.1128	0.0872	0.0377	0.0842	0.1460	0.1205	0.1085
18-2	学習姿勢_自分が知りたいことについてさらに調べたり考えたりする	0.0212	0.0907	0.0438	0.0149	0.1208	0.1727	0.0654	0.0860
18-3	学習姿勢_新しいことを発見したり、考えたりすることはおもしろい	0.0119	0.1150	0.0599	0.0269	0.1100	0.1738	0.0318	0.0406
18-4	学習姿勢_分からないことが多くても、何とかして解決しようと努力する	0.0493	0.1552	0.1192	0.0671	0.0559	0.1539	−0.0015	0.0365
18-5	学習姿勢_自分には関係が無さそうに思えることでも自分自身のこととして考えようとする	0.0661	0.1537	0.0911	0.0153	0.0482	0.1651	0.1139	0.1197
18-6	学習姿勢_自分について振り返り、将来の中で自分が出来ることを考えてみる	0.0715	0.1844	0.0769	0.0436	0.0946	0.2033	0.0103	0.1349
18-7	学習姿勢_他の中で自分と似た思われている色々な物事を、本当にそうなのか自分自身	0.0101	0.0222	0.0118	0.0267	0.0268	0.0974	0.0792	0.1044
18-8	学習姿勢_社会の中の様々な事がらについて、自分なりに考えたり意見をもったりする	0.0803	0.1173	0.0119	0.0061	0.0143	0.1144	0.0084	0.0788
18-9	学習姿勢_他の人の考えや意見をよく聞く	0.1446	0.1796	0.0473	−0.0045	0.0852	0.1564	0.0330	0.0682
18-10	学習姿勢_他の人に自分の意見や考えを、分かりやすく伝えようとする	0.0572	0.1686	0.0710	0.0228	0.0980	0.1686	0.0626	0.1100
18-11	学習姿勢_他の人の考えや意見の違いを受け入れ、話し合う	0.1201	0.1748	0.0472	−0.0043	0.1426	0.1755	0.0984	0.1627
18-12	学習姿勢_他の人の意見や考えを、自分自身の考えや意見に活かす	0.1294	0.1358	0.0437	0.0227	0.1592	0.1714	0.1024	0.1652

▶コロナ疲れのあった生徒は、学習姿勢を低下させていたことを示唆する。

Slide 5

その中でも特に注目するべきは、対面授業復帰後 1 年目の 2021 年度では、番号 22-14「学校以外で勉強する時間」と番号 18 の学習姿勢の多くの項目で相関が認められていたのが、対面復帰 2 年後の 2022 年度では相関が失われていることです（Slide 6）。その代わり、2021 年度では番号 22-13「オンライン学習の時間」と番号 18 の学習姿勢の多くの項目で相関が見られなかったのが、2022 年度では、多くの項目で相関が認められています。

コロナでの生活習慣の変化と学習姿勢　2021-2022比較

▶2021年度では22-14「学校以外で勉強する時間」と学習姿勢の多くの項目で相関が認められていたのが、2022年度では相関が失われている。

▶その代わりに、2021年度では22-13「オンライン学習」と学習姿勢の多くの項目で相関が見られなかったのが、2022年では相関が多くの項目で認められている。

▶この要因を検討するに、コロナ禍の長期間にわたってオンライン授業での学習スタイルに慣れた中で、突如として対面授業に復帰したことにより、教師や友人との直接的な接触のもので学習を進めるスタイルに適応せず、1年間のタイムラグを経て、学習姿勢が低下した生徒がいたものと推察される。

▶今、そうした生徒をいかに支援するかが重要である。

	22-13 コロナでの変化、オンライン学習の時間	22-14 コロナでの変化、学校以外で勉強する時間	22-13 コロナでの変化、オンライン学習の時間	22-14 コロナでの変化、学校以外で勉強する時間
	2021対面		2022対面	
18-1	0.0788	0.1871	0.1275	0.0517
18-2	0.0780	0.1983	0.1077	0.0536
18-3	0.1003	0.1932	0.1047	0.0392
18-4	0.0651	0.1862	0.0845	0.0625
18-5	0.0076	0.1246	0.0848	0.0314
18-6	0.0173	0.1256	0.1009	0.1346
18-7	0.0429	0.0995	0.1010	0.0737
18-8	0.1237	0.1694	0.1260	0.0301
18-9	0.0627	0.1543	0.1156	0.0750
18-10	0.0736	0.1575	0.1053	0.0509
18-11	0.0961	0.1483	0.1425	0.0791
18-12	0.0705	0.1924	0.1245	0.0778

Slide 6

この要因を検討するに、コロナ禍の長期間にわたるオンライン授業の学習スタイルに慣れた中で、突如として対面授業に復帰したことにより、教師や友人との直接的な接触の下で学習を進めるスタイルに適応せず、1 年間のタイムラグを経て学習姿勢が低下した生徒がいたものと考えられます。

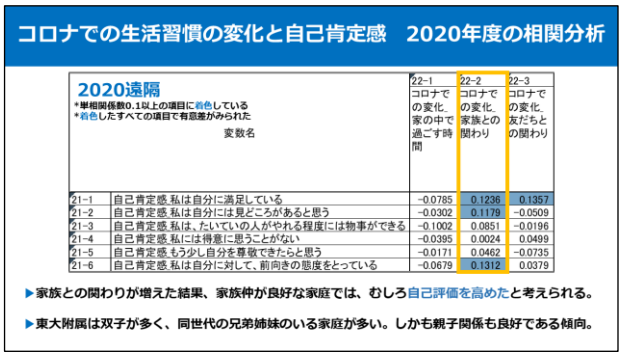
以上のことから、東大附属では、一般的な傾向とは異なり、コロナ禍のステイホームでも、家庭環境や兄弟姉妹関係が良好であることにより学習姿勢を維持した生徒が多かった一方、対面授業復帰後において学習姿勢を低下させた生徒がいたことが推察されました。つまり、まさに今、そうした生徒をいかに支援できるかが問われているのです。

3. コロナ禍前後の生活習慣の変化と自己肯定感（2020 年度の相関分析）

続いて、分析項目を変えて、オンライン授業であった 2020 年度の生活変化を尋ねた項目と自己肯定感を尋ねた項目との相関分析を実施しました。

Slide 7 を見ると、番号 22-2「家族との関わり」と、番号 21-1 および 21-2 の自己評価との高さには相関が見られます。これは、コロナ禍において家族との関わりが増えた結果、家族関係が良好な家庭では、むしろ家庭内での交流や家事労働への従事を通じて、

自己評価を高めたものと考えられます。



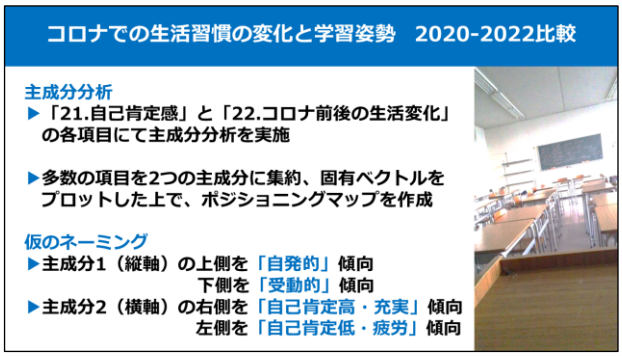
	変数名	22-1 コロナでの変化、家の中で過ごす時間	22-2 コロナでの変化、家族との関わり	22-3 コロナでの変化、友だちとの関わり
21-1	自己肯定感 私は自分に満足している	−0.0785	0.1236	0.1357
21-2	自己肯定感 私は自分には見どころがあると思う	−0.0302	0.1179	−0.0509
21-3	自己肯定感 私は、たいていの人がやれる程度には物事ができる	−0.1002	0.0851	−0.0196
21-4	自己肯定感 私には得意に思うことがない	−0.0395	0.0024	0.0499
21-5	自己肯定感 もう少し自分を尊敬できたらと思う	−0.0171	0.0462	−0.0735
21-6	自己肯定感 私は自分に対して、前向きの態度をとっている	−0.0679	0.1312	0.0379

Slide 7

東大附属は双子が多いので、ステイホームは、同世代の兄弟姉妹と家庭内で絆を深めるチャンスになったと考えられます。しかも、先ほど述べたように、親子関係も良好である家庭が多く、テレワークにより親子時間を増やし、生活が充実したのではないかと推察されます。

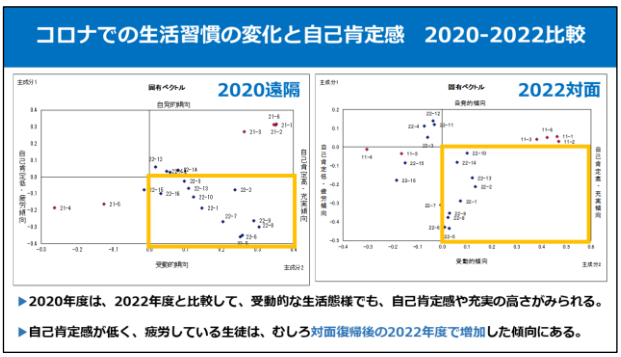
4. コロナ禍前後の生活習慣の変化と自己肯定感（2020–2022 比較）

この結果を可視化するために、2020 年度と 2022 年度における自己肯定感の各項目と、生活態様の各項目にて主成分分析を行いました（Slide 8）。先ほどと同様、ポジショニングマップにプロットされた項目名より、主成分 1（縦軸）の上側を自発的傾向、下側を受動的傾向、主成分 2（横軸）の右側を自己肯定高・充実傾向、左側を自己肯定低・疲労傾向と、それぞれネーミングしました。



Slide 8

ここからも、生活が自発的傾向であると自己肯定感が高く、充実傾向になることが読み取れます（Slide 9）。そして特に注目するべきは、オンライン授業であった 2020 年度は、対面授業であった 2022 年度と比較して、受動的な生活態様であったとしても、自己肯定感や充実度の高さが見られることです。図の右下、黄色の枠で囲った箇所にプロットされた項目の数や位置を比較すれば、オンライン授業であった 2020 年度の方が明らかに自己肯定感は高く、充実している傾向が読み取れます。これは、コロナ禍においても東大附属生が学習姿勢を維持していたことと整合的な結果ですし、やはり家族時間の増加が東大附属生においては肯定的な影響をもたらしたものと推察されます。



Slide 9

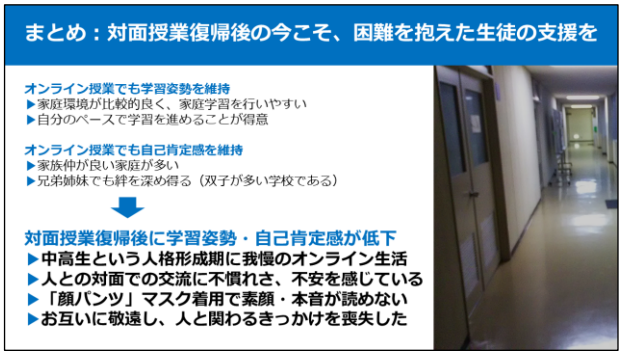
一般的には、コロナ禍の新しい生活様式は、中高生の心身に大きな悪影響をもたらしたとされ、学習姿勢や自己肯定感も低下させたと予想したところですが、今回の結果は、家庭環境や生徒自身の能力が相対的に優れた学校に特有の事情を定量的に反映した、興味深い結果であると言えます。

しかし、もう一つ重要な点が、自己肯定感が低く疲労している生徒が、対面授業復帰後の 2022 年度に増加した傾向にあったことです。東大附属においては、対面授業に復帰した 2021 年度以降、コロナ禍前と比較して保健室の利用者数が著しく増加し、欠席数も増え、さらに、東大附属における探究的学習の要である卒業研究のテーマが、全体的になかなか決まらないといった現象が発生しました。

5. まとめ：対面授業復帰後の今こそ、困難を抱えた生徒の支援を

このことは、中学生、高校生という人格形成期においてオンライン生活を行い、しかも対面授業復帰後もマスクを着用し続けたことにより、お互いの表

情が見えず、素顔や本音の読めない不安定な対人関係に置かれたことが影響していると考えられます（Slide 10）。その結果、生徒同士がお互いに敬遠し、関わるきっかけを失い、家族以外の人との対面でのコミュニケーションを行うことに不慣れさや困難さを感じている生徒が多くなったものと思われます。



Slide 10

東大附属のように、ディスカッションやグループワーク、発表を伴う学習の多い学校では、そうした困難を抱えた生徒にとって非常に過ごしづらい場所になっている可能性も否定できません。東大附属の生徒は、相対的に対人コミュニケーションや探究的な学びを得意としていますが、重要なのは、たとえわずかな人数であったとしても、そうした困難を抱えた生徒に寄り添い、支援をすることです。

文部科学省は、「誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策（COCOLO プラン）」を取りまとめ、学校以外の関係機関や民間組織とつながることを勧めています。本日参加されている全ての先生方、関係者の皆さま、ぜひ私たちと共に、まさに今コロナ禍を経て困難を抱えている全国全ての児童生徒を、誰一人取り残さず支援する場を広げていきましょう。子どもの権利や尊厳が守られる安全で安心な学校環境が、全ての子どもたちに保障される社会の実現を目指し、私からの報告とさせていただきます。

（山本）　発田さん、ありがとうございました。冒頭の開会挨拶でも申し上げましたが、やはりいろいろなことが時間を経て表れてきているというのが、私たちデータを分析した者の印象です。

質疑応答

注. 質問者の匿名性を保つため、各質問者に対して質問者 1.2…という番号を付与した（同じ質問者の場合には同じ番号を付与している）。

（北村）　山本先生、発田さん、ありがとうございました。非常に興味深いデータだったと思います。もちろん東大附属は、これまで探究的な学びに積極的に取り組んできた学校であり、入試を経て生徒を受け入れている学校でもあるので、ここでのデータをそのまま他の学校に当てはめることは難しく、家庭環境等を含めて、必ずしも一般的な学校とは言えません。しかし、逆に言えば、一般的な公立学校等で、より多様な家庭背景を持った子どもたちがいる学校においては、今回のうまくいっている結果とは逆転した現象が起きているのではないかということが想像できるかと思います。

また、最後に山本先生も指摘されたように、非常に遅れて現象が出現していることについても、今後われわれは考えていく必要があるのではないかと思います。

質問者 1：学習面で実際に個別のサポートは行われていますか。また、対象生徒は本調査に基づいて抽出したのでしょうか、それとも教員の判断でサポートしているのでしょうか。

細矢：本校では、個別のサポートは各授業者に任されています。ですので、心配な生徒については呼んで個別に指導するケースはあると思いますが、必須ではありません。

また、個別のサポートの対象生徒は本調査とは関係ありません。本調査のパネル調査は年度の最後に実施しており、普段の授業のフィードバックのような形で実施しているわけではないと考えています。

淺川：元副校長の淺川です。細矢副校長からもありましたが、学習面で支援が必要な生徒には、各教科担当によるサポートを原則にしつつ、定期考査の結果を基に学年担任団が 15〜20 名程度に声かけをして一斉の放課後補習を行なったりすることも行われてきました。パネル調査を基に直接生徒を抽出するようなことは、学習指導やその他の学校生活でも行っていません。

質問者 2：コロナ禍のときとそれ以降では毎日の通学という要因が異なっていると思いますが，通学時間の長い生徒が疲れて自己肯定感が低くなるという傾向はないでしょうか。

細矢：数名の教員と話した限りでは、特別そういう傾向はないようです。今、そばに生徒が 3 名いまして、この 3 名の生徒に関しても、あまり関係はないかなと答えています。

北村：先ほどの日高先生のデータでは体力的なところなどで影響が出ていたので、疲労という面では恐らく通学の再開による一定の影響があったのではないかと推察できますが、それによって自己肯定感が低下するほどの顕著な影響はあまり見られなかったのかもしれません。

質問者 3：発田さんの二つのプロット図の意味をもう少し詳しく説明していただけないでしょうか。2020 年の方が自発的態度や自己肯定感が高いという結果の根拠がどこにあるのか、もう一度教えていただきたいです。私の理解力不足なのですが、発田さんのご発表の要旨として、東大はコロナ禍を経て自己肯定感・自発性も高い生徒が減った、という理解で合っているでしょうか。

発田：二つのプロット図の意味ですが、これらの図は主成分分析の結果を表しています。主成分分析では、相関のある多数の変数から固有値あるいは固有ベクトルと呼ばれる値を算出し、二つの主成分を抽出します。この主成分は、データの散らばりがどの

ような影響によって左右されているかについて、何かしらの説明能力を有すると考えられます。そこで、分析者が主成分を構成するデータを観察し、データの散らばりに影響を与えていると推察される内容をネーミングします。

今回は全体のデータの内容と比較したり、あるいはプロットされた質問項目の中身を見たりして、図の中での位置取りを総合的に観察することでネーミングを行いました。その結果、先ほどの図では、2020年度の方が学習姿勢や自己肯定感が高い傾向にあると説明しました。

（北村）　質問の最後の、「東大附属ではコロナ禍を経て自己肯定感や自発性の高い生徒が減ったという理解で合っているでしょうか」という点についても、少しお答えいただけますか。

山本：これは私からお答えします。コロナ禍の1年目は皆さん不安や緊張で気が張っていましたが、2年目、3年目からは、体調不良による保健室の来室者が増える等のことがだんだん顕著になっていきました。私自身は、ご質問のとおり、この2年目、3年目の結果が、自己肯定感が高い生徒が減ったことにつながっているのではないかという印象を持っています。

淺川：元副校長の淺川です。学年ごとの傾向や、コロナ禍以前との比較も行わないと明確なことは言い難いかと思います。特に2020年度のデータについては例年どおり年度末の3月に行っていますので、取り戻しつつある日常の中での調査となっており、リモート期間中の5月や、6月の再開直後に取っていたら別の結果になっていた可能性もあります。

発田さんも山本先生も強調されていたように、まだまだ遅れて深刻さが表れてくるということは、本当にそのとおりであろうと心配しています。

（北村）　コロナ禍というのが非常に特殊な状況で、当初は何でもかんでも禁止・中止して子どもたちが押さえつけられてしまいました。そのときは非常事態なので仕方ないと、みんな緊張感を持って過ごしていたのが、少し落ち着いてきて日常に戻り、対面授業も再開して通学するようになり、ただ、世の中はコロナ禍前とは全く違い、常にマスクをし、食事をするときも黙って食べるという不思議な状況が数年にわたって続く中で、当初の緊張感が途切れてきたところで少し遅れて子どもたちに影響が出てきたのではないかと感じています。

それが東大附属のように家庭環境が比較的良好な生徒が多いと思われる学校でも出てきていたことについても、われわれは考えなくてはいけないのではないかと感じています。

パネル調査の結果は、直接的に日々の学習指導や学校生活のサポートに反映するというよりは、経年的な変化を見て東大附属での教育活動に生かすという趣旨で、CASEERと東大附属が一緒にデータを取っています。もしこれを学習指導などに使うのであれば、データを取る回数を増やしたり、データを取る項目も少し変わってくるかと思いますが、趣旨として、直接的な指導のためのデータではないということはご理解いただければと思います。

第Ⅰ部を締めるに当たって、日高先生、山本先生、発田さんからぜひコメントを頂ければと思いますが、いかがでしょうか。

（山本）　私自身の問題意識は、やはり体力の低下です。これによるけがが多いことに対して、やはり何らかの対応が必要だと感じます。この点について、もし関係の方がいらしたら、何かアドバイスやご提案を頂けるとうれしくと思います。

（北村）　今日ご参加されている方の中で、アドバイス等がある方は、ぜひこの後の休憩時間にQ&Aの方に書き込んでいただければと思います。

（日高）　今回の体力測定のデータの分析は、あく

まで学年全体の平均とばらつきという形で見ています。恐らく生徒個人個人によって体力低下のパターンが異なると思うので、今後は個人の特徴をトレースできるような分析方法を使って検討を進めたいと考えています。

（北村）　それは非常に大事なことだと思います。今回は全体的な傾向が見えてきたので、これをもう少し個人のレベルに落とし込んで、丁寧に見ていくことができればいいと思います。

（発田）　今回の結果には東大附属という学校特有の事情も少なからず反映されてしまっていますが、一つ言えることは、コロナ禍を経て対面復帰後の今こそ支援が必要な生徒がいるということです。今後、科学技術の発展などによって、オンライン授業はもちろん、人工知能やアバターなどの技術を用いた授業が普及する未来が予測されていますが、そういった局面では、物理的に距離のある所から遠隔で授業を受けるという選択肢が出てきます。そういった中では、今回と同じように、対人コミュニケーションで課題や困難を抱える生徒が出てきてしまう可能性があるので、そういった未来に予測される課題についても、今回の結果を応用して考えていくことが重要だと考えています。

ですので、他の学校の事情や、東大附属以外の環境でコロナ禍を経て起きている現象について、ぜひ今回出席されている皆さんから情報を頂ければ、大変うれしく思います。

（北村）　今回の結果は東大附属という文脈の中での結果ではありますが、これを他の学校で参考にしていただき、それぞれの学校が直面している課題、児童生徒一人一人が直面している課題を丁寧に見ていくことが大事かと思います。

先ほど山本先生も、けがの問題を指摘されましたが、体力低下やそれに伴うけががあることについては、コロナ禍の後、何となく感じられている方が多かったのではないかと思います。それに加えて、学習姿勢や自己肯定感も含め、東大附属で今回取ったようなデータをいろいろな学校で取っていく中で、子どもたちの今の状況を理解していくことは非常に大事ではないかと思います。

今、Q&A の方でもう一つ質問を頂きました。

質問者 4：近年、学校の働き方改革などで運動会・持久走大会などの学校行事を縮小させている学校が増えていると伺っています。そうした体育系の課外活動を地域と連携して充実させることが一つ重要かと思うのですが、いかがでしょうか。また、そうした取り組みは附属では行っておられるでしょうか。

細矢：中野区の近隣の中学校の部活動では、本校の施設を使って合同練習を行っています。また、年度によって異なりますが、部員数の関係で近隣の中学校や高等学校と合同チームを作って、公式戦に参加しているケースもあります。

淺川：学校の外の方とつながって文化活動を充実させていくというのが、まさに「アートクロスロード」と芸術祭の取り組みでした。行事という面ではかなりコロナ禍の下でも生徒・教員ともに頑張った東大附属ですが、運動部活動についてはまだまだこれからです。

（北村）　国立大学附属の中等教育学校ということで、公立の学校に比べると地域とのつながりは、今後検討していく余地がまだまだたくさんあると思います。ご指摘のように、非常に大事なことなので、東大附属でも今後考えていくべきことではないかと思います。

皆さん、いろいろとご質問、ご意見ありがとうございました。とても興味深いデータや、今後の在り方についても示していただきました。特に、少し遅れて問題が出現している現状に対して、どう考えるべきかということは、さらに議論が必要ではないか

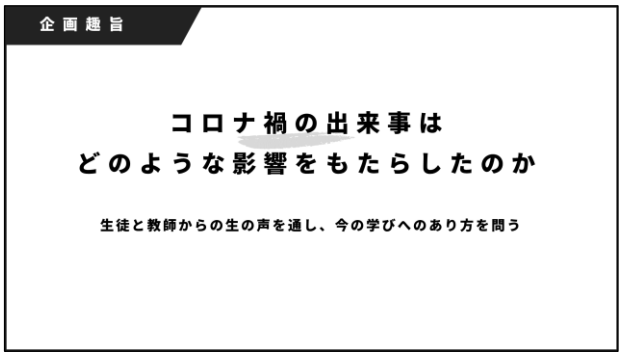
と思います。

第Ⅰ部では「コロナ禍の影響を紐解く」として、パネル調査の身体的な側面や、学習姿勢や自己肯定感に関するデータを紹介させていただきました。これらを踏まえ、第Ⅱ部では、実際にコロナ禍で学びがどのように変化したのかということについて、附属の生徒や先生方と議論できればと思っています。

第Ⅰ部にご登壇された皆さま、コメント・質問を下さった皆さま、ありがとうございました。

第Ⅱ部　コロナ禍での学びの変化

（北村）　第Ⅱ部では、東大附属の生徒や先生と共に、コロナ禍の中でどのような経験をして、それを今どのように振り返り、今後にどう生かしていくのかということを、座談会形式でお話しできればと考えています（Slide 1）。



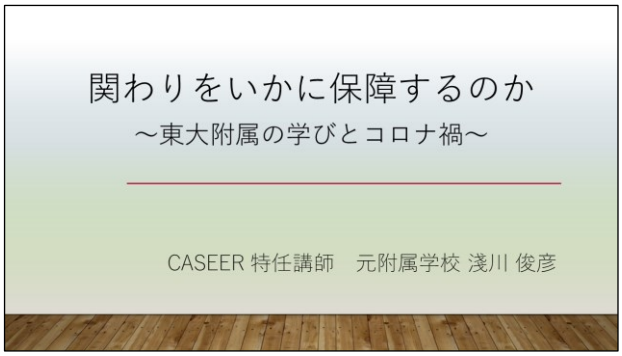
Slide 1

生の声に基づきながらお話しできればと思いますが、ご登壇いただくのは、東大附属の大井先生、在校生の野々村さん、髙濱さん、永利さん、そしてコメンテーターとして、CASEER の特任講師であり元副校長の淺川先生です（Slide 2）。

Slide 2

座談会を始める前に、コメンテーターの淺川先生から、コロナ禍における東大附属の状況についてご紹介いただければと思います。

コロナ禍における附属学校の状況
「関わりをいかに保障するのか～東大附属の学びとコロナ禍～」
淺川　俊彦（CASEER 特任講師）



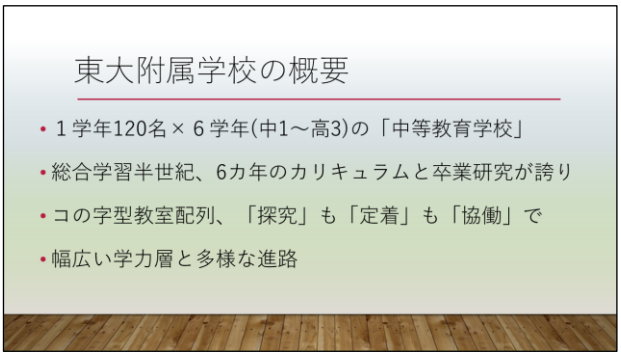
現在はCASEERの特任講師ですが、コロナ禍直前の2019年度から2021年度までの3年間、東大附属の副校長を務めましたので、当時の様子をかいつまんでお話しできればと思います。

1. 東大附属の概要

東大附属は1948年の創立で、現在は「探究・協働の学びを通して豊かな市民性を育む」ことを目標として実践している学校です（Slide 1）。都庁からちょうど2kmのところにあり、生徒720名のうち約400名が中野、杉並、世田谷、練馬、新宿、渋谷といった区部の西部、山手エリアから通っており、約100名が神奈川や埼玉、千葉といった他県から通っています。

Slide 1

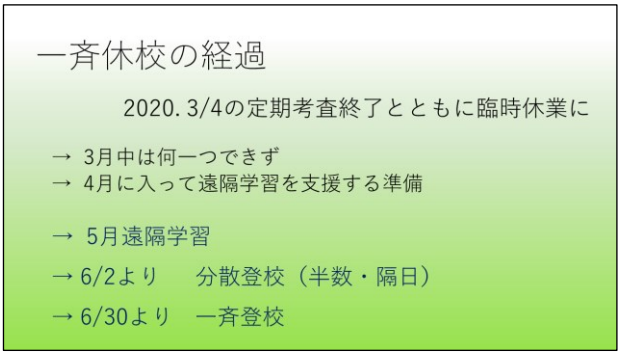
1学年120名が6年間、基本的に出入りなく中1から高3まで過ごす中等教育学校です（Slide 2）。1966年に特別学習という名前で総合的な学習の時間を設定し、1983年には卒業研究をスタートさせました。その後、総合的な学習の6カ年のカリキュラムをいろいろな形で整備しながら実践してきました。2005年からは、協働の学習を全ての授業の全ての時間に組み込んで、コの字型の教室配列をデフォルトにしながら、探究的な学びのみならず定着の学習をも進めています。他の国立附属に比べると非常に幅広い学力の生徒たちが通っていて、超難関大学に自力で行く生徒もいれば、入学時に分数の通分・約分が怪しい生徒や、英語の受動態あたりでつまずく生徒もいます。



Slide 2

2. 一斉休校の経過

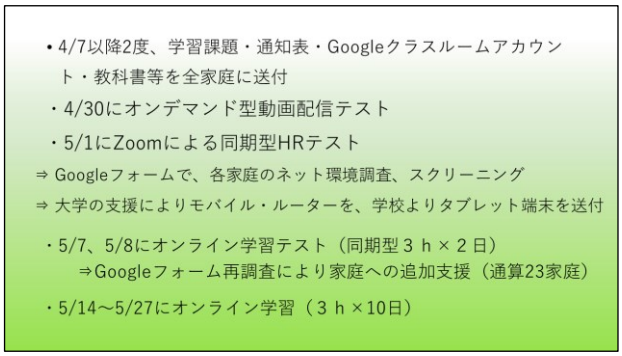
2020年3月4日、定期考査終了とともに臨時休業に入りました。その後、3月中は何一つできず、4月に入ってから各家庭の遠隔学習を支援する準備を行いました（Slide 3）。5月に実際にリモート学習を行い、6月2日からは1日置きにクラスの半数が登校する分散登校を行い、6月30日から一斉登校に戻しました。



Slide 3

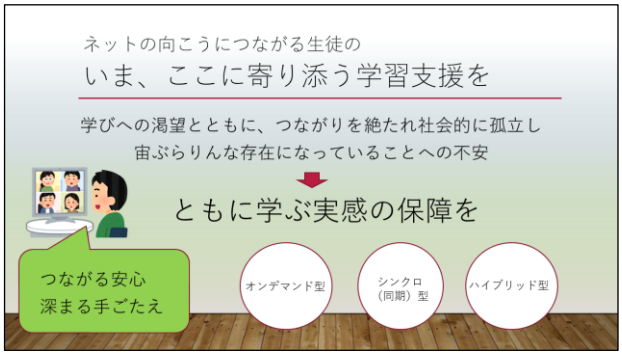
リモート学習については、大学の支援を受けて、

各家庭で Zoom による同時双方向の授業が受けられる状況をつくりました（Slide 4）。5 月の連休明けにそのテストを行い、結果的に 2 週間、1 日 3 時間の同時双方向のオンライン学習を行いました。



Slide 4

その中で教員が大事にしたのは、学びだけでなく、つながりを断たれて社会的に孤立している子どもたちの不安を取り除くことです（Slide 5）。一方通行で課題を与えるだけではなく、子どもたちの「共に学んでいる」という実感を保障するため、教員たちは懸命に頑張りました。



Slide 5

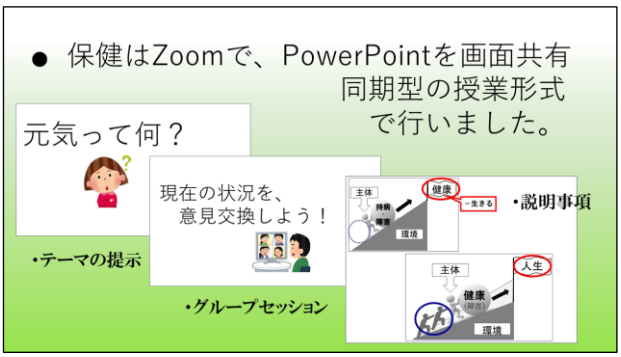
3. 生徒に寄り添う学習支援

体育では、いつもやっている体操や先生との競争を行い、保健では、PowerPoint を使って同期型の授業を行いました（Slide 6、7、8、9）。今まさに子どもたちが直面している問題を取り上げたり、登校再開後はカリキュラムを入れ替え、今まさに関心事になっていることから学びを再スタートさせたりといった取り組みも行いました（Slide 10、11）。

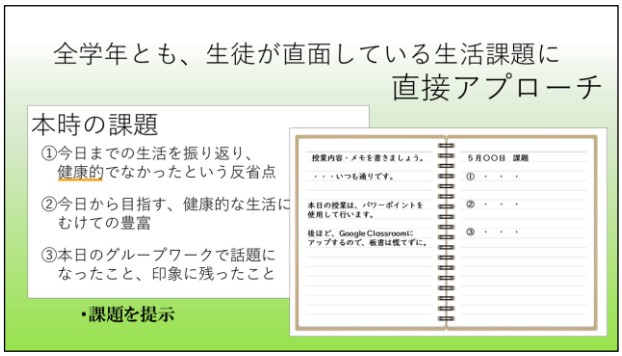
Slide 6

Slide 7

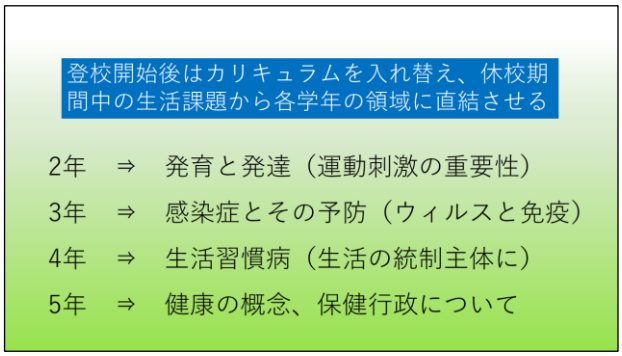
Slide 8



Slide 9

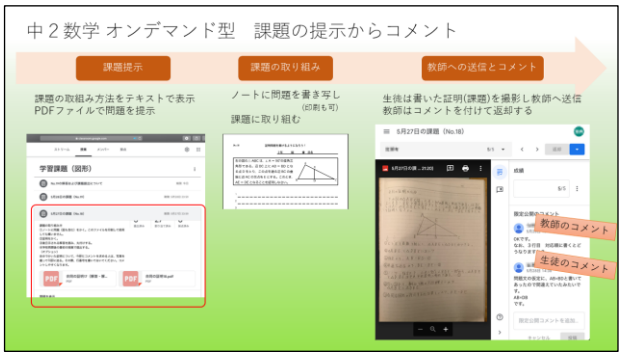


Slide 10



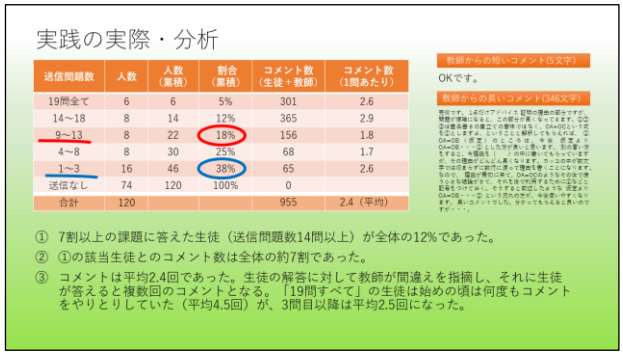
Slide 11

数学ではオンデマンドで課題を提示し、それを子どもたちが自分の好きなタイミングで取り組めるようにしました（Slide 12）。当初、このオンデマンド型がかなり有効なのではないかと考えていました。子どもたちは、あり余る時間の中で生活リズムもそれぞれになっているだろうから、自分のタイミングでできるのが良いのではないかと考えたのです。



Slide 12

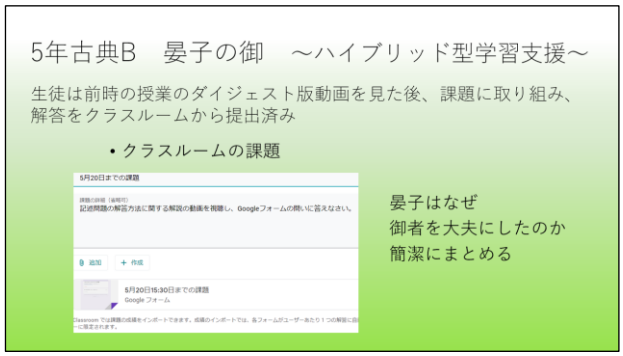
ですが、実際に課題の提出状況を見ると、19 問中、全て回答した生徒は 5%にすぎず、半分ぐらいの生徒は 19 問の半分にも満たない状況でした（Slide 13）。普段、割と学習意欲が高い子たちですらこの状況だったので、何とかしなければいけないという問題意識を強くした結果でした。担当教員からは、簡単な一言から十数行にわたるようなコメントまで、丁寧に返していたのですが、それでもなかなか生徒の取り組みは増えませんでした。



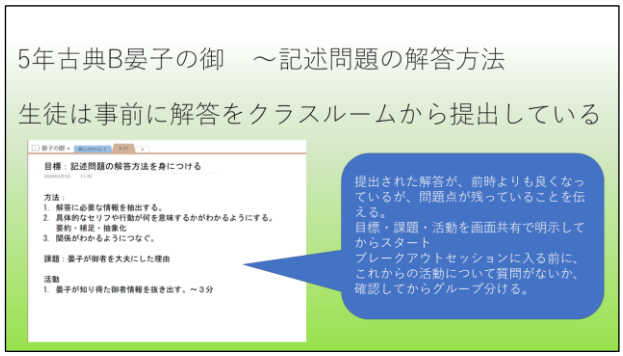
送信問題数	人数	人数（累積）	割合（累積）	コメント数（生徒＋教師）	コメント数（1問あたり）
19問全て	6	6	5%	301	2.6
14～18	8	14	12%	365	2.9
9～13	8	22	18%	156	1.8
4～8	8	30	25%	68	1.7
1～3	16	46	38%	65	2.6
送信なし	74	120	100%	0	
合計	120			955	2.4（平均）

Slide 13

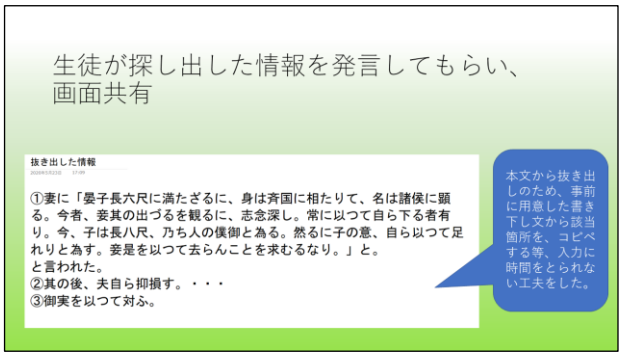
古典はハイブリッド型で、事前に「晏子はなぜ御者を大夫にしたのか、簡潔にまとめなさい」という課題を出し、生徒全員が提出し終わっているという前提で、Zoom で全員がつながった学習が組まれました（Slide 14）。簡潔に生徒が書いてきたものを全員で共有し、さらにブレークアウトセッションを用いて小グループで議論し、それをまた学級全体で共有するという学習です（Slide 15、16、17）。事前に自分が書き込んだことと、話し合いを経て感じたことを並べて比較することで、協働を通して自分の考えが深まったことを実感してもらえるつくりになっていると思います（Slide 18、19）。



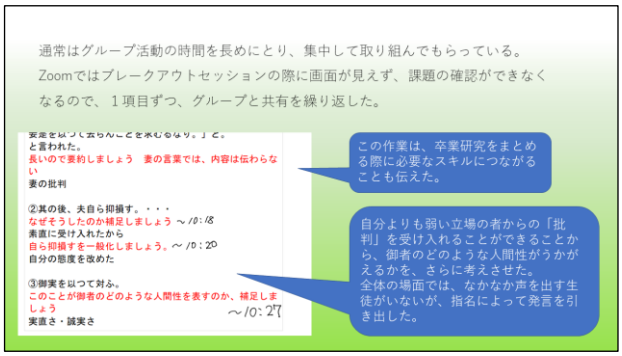
Slide 14



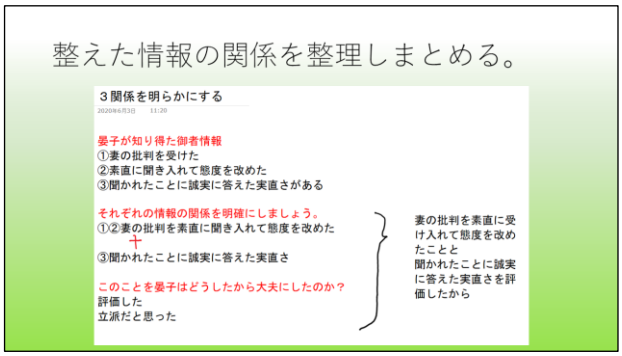
Slide 15



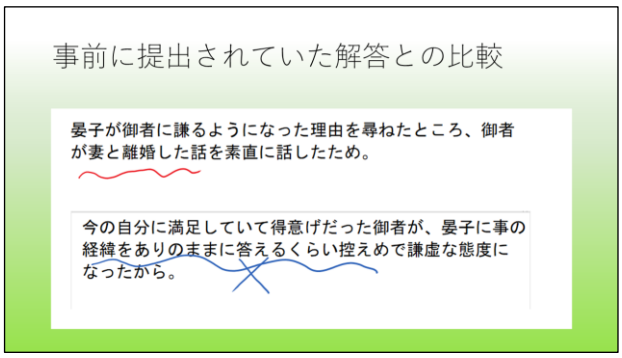
Slide 16



Slide 17

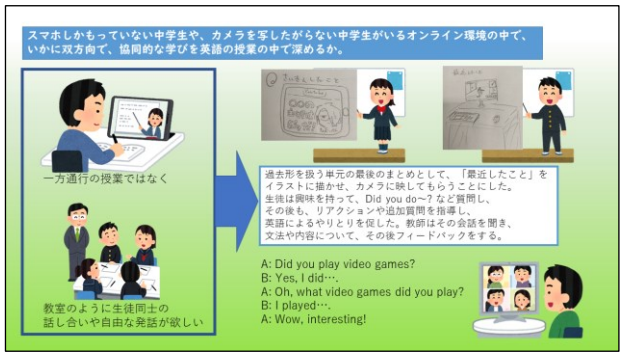


Slide 18

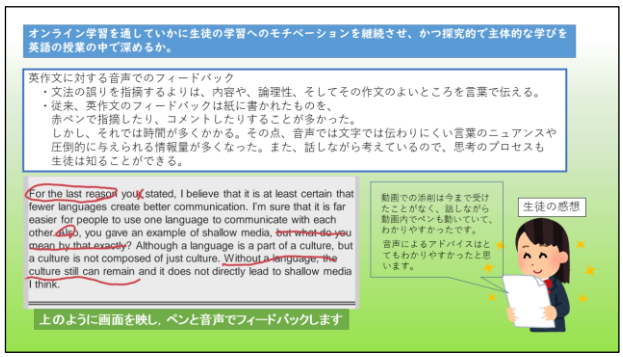


Slide 19

英語も、共に学んでいるという感覚を生徒に保障するために、最近したことを絵に描いてスマホで共有し、その絵に対して他の生徒が質問し、英語で答えるという学習をしました（Slide 20）。また、高校生の英作文の授業では、生徒が書いた作文を画面で共有し、それにリアルタイムで赤ペンを入れながら音声で解説するという取り組みをしました（Slide 21）。



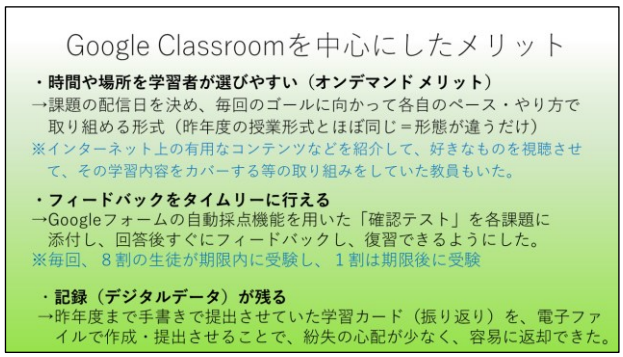
Slide 20



Slide 21

4. Google Classroom を中心にしたメリット、デメリット

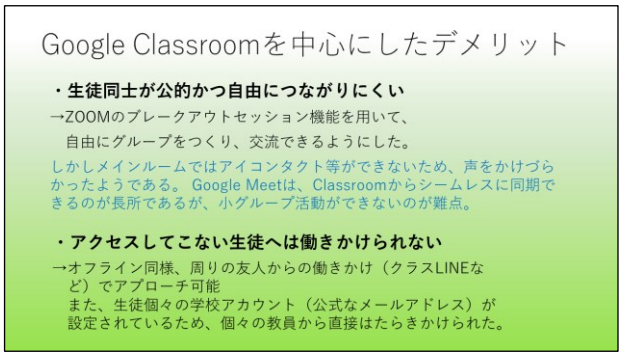
Google Classroom を中心にオンライン学習を行ったことで、メリット、デメリットが見えてきました（Slide 22）。メリットとしては、特にネット上の有用なコンテンツを共有し、自由に活用する等の場面で、オンライン学習がそれ以前にない効果を発揮しました。また、確認テストを各課題に添付することで、8 割程度の生徒が期限内に課題に取り組むという工夫も見られました。



Slide 22

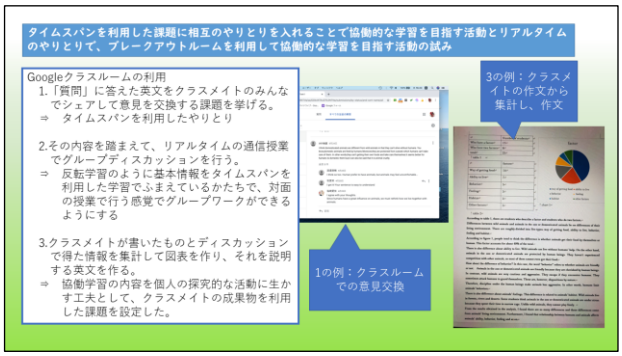
一方で、生徒同士が公的かつ自由につながりにくいというデメリットがあるため、ブレークアウトセ

ッションなどを用いて、なるべく生徒同士の関わりを保障するようにしました（Slide 23）。また、クラスLINE や生徒個々の学校アカウント（メールアドレス）を通して、なかなかアクセスしてこない生徒に個別に対応することもありました。

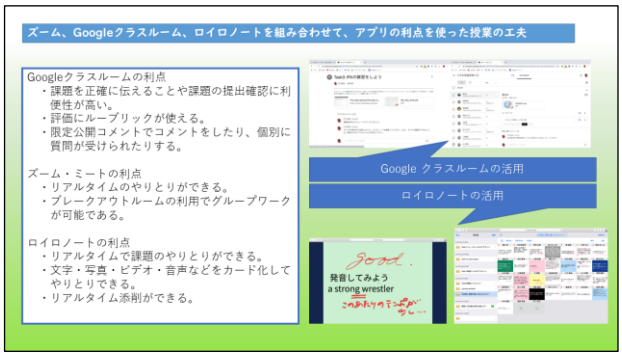


Slide 23

英語の学習では、Zoom による同時双方向、Google Classroom による配信、あるいはロイロノートなど、さまざまなアプリを組み合わせて、何とか協働的なアプローチで探究的な学習を保障しようという教員の努力が非常にいい形で表れていました（Slide 24、25）。



Slide 24



Slide 25

5. 本当の協働がしたい

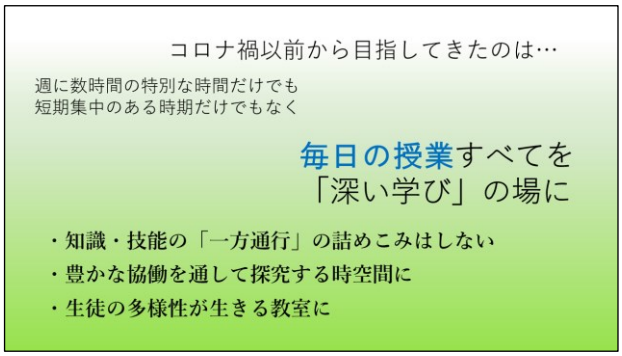
しかし、これだけ教員が頑張っていろいろなものを用意しても、子どもたちからは「一人ではもう限界」「本当の協働がしたい」という声が次々に寄せられるようになりました（Slide 26）。副校長に直接つながる緊急メールアドレスを開設したのですが、そこにも生徒の悲鳴が届くことがありました。

Slide 26

「言葉のやりとりは Zoom でもできるけど、何かそれだけじゃないんだよね」「画面の中の言葉も人もただの記号だ。そうじゃない関わりがしたい」という声があり、やはり生身の身体でそばにいて共にのぞき込んだり、指を差したりできることが大事なのではないかと感じました（Slide 27）。

Slide 27

私たちがコロナ禍以前からずっと目指してきたのは、特別な時間に探究をすることではなく、毎日の授業の全てを探究的な学びの場にしていくことです（Slide 28）。そのために、教員が黒板を背にして一方通行で説明し、ドリルやテストで歩留まりを測って終わりということはやめて、生徒の多様性が生きるような、協働を大事にした授業をずっと心がけてきました。その結果、やはりオンラインでは物足りないという子どもたちの声につながったのではないかと考えています。



Slide 28

ICT も個別最適化のツールというよりは、協働のツールとして生かすことをずっと追求してきました（Slide 29）。その典型が DeAL 教室です（Slide30）。机がタブレットのような働きをしていて、机上に呼び出したデータに直接書き込み、手で横に払うと壁面にあるホワイトボードに共有されたり、たとえば体育では対戦相手のチームにゲーム分析の様子を直接送ったりできる教室で、体を使って ICT を利用することが大事ではないかと考えて実践してきたわけです。

Slide 29

Slide 30

6. コロナ禍後の授業

Slide 31、32 は、コロナ禍明けの音楽の選択授業の様子です。音楽家の生涯がドラマ化されたものをみんなで見ながら議論したり、高機能な空気清浄機を大量に入れて、マスクをしながらではありますが、合唱の授業も早い段階で再開しました。やはり隣で真剣に取り組んでいる仲間がいること、その息遣いを感じることが、子どもたちにとっては大事だったのではないかと考えています（Slide 33）。

Slide 31

Slide 32

Slide 33

Slide 34 もコロナ禍直後の様子ですが、竹ひごを使って竹籠を編む作業をしています。「ここはどうなっているんだっけ」という、ほんの小さな関わりが大事なのではないかと思います。

Slide 34

これまで探究的な学びについては、生徒自身が試行錯誤して体感することを大事にしながら授業を組んできました（Slide 35）。

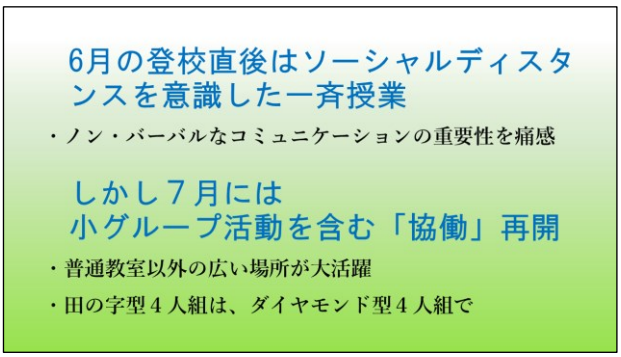
Slide36、37 は選択の課題別学習で、どうすればペットボトルが狙いどおりに飛ぶかという「水ロケット」にチャレンジする学習です。航空力学や物理の非常に複雑な計算も入ってきますし、その瞬間の風向風速を読み、射出角や水と空気の量なども決めるのですが、的当ての楽しさでモチベーションをかき立てながら、夢中になって計算をしていました。

Slide 35

Slide 36

Slide 37

そうした姿を全ての授業で早く取り戻すためには、やはりノンバーバルなコミュニケーションが大事だと痛感しました。ですから、6 月の最初の数週間はソーシャルディスタンスを意識した一斉授業を行っていましたが、7 月には早くも協働を再開しました（Slide 38）。机を向かい合わせるのも田の字型の 4 人組み（対面する相手との距離は約 80cm）ではなく、せめて 140cm ぐらいは距離を取ったダイヤモンド型にしながらでも 4 人組を取り入れたり、普通教室以外の広い場所に移ったりしながら授業を行いました。Slide 39 は、その時期の七夕で子どもたちが書いた短冊です。

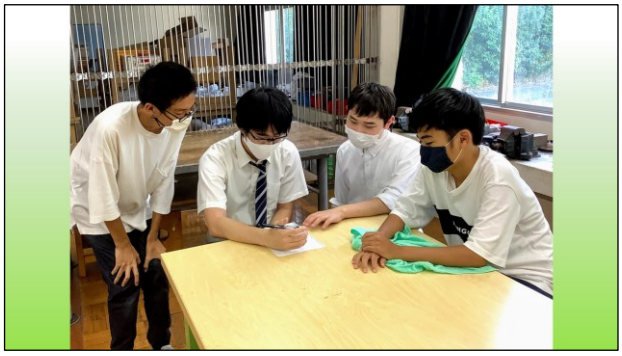


Slide 38

Slide 39

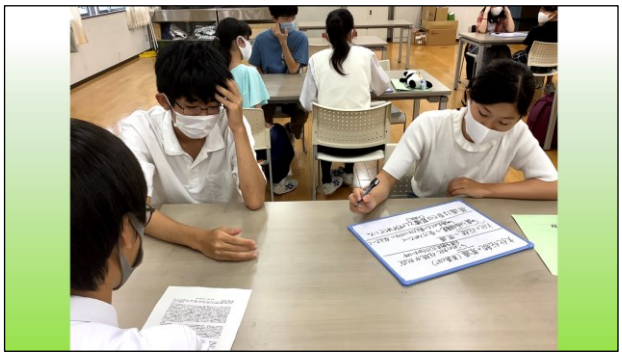
Slide 40 は、協働を再開したその日のうちに、部活動を今後どうするかという相談をしている文化部の

男子の様子です。やはりこうして身を寄せ合って何かをすることが大事だったのだと思います。



Slide 40

Slide 41、42 は、広い教室で 4 人組が身ぶり手ぶりで語っている姿です。



Slide 41

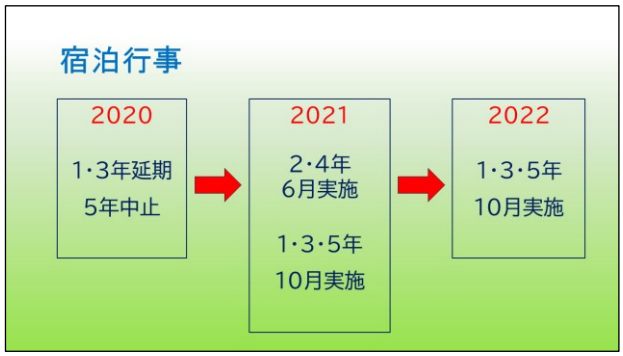
Slide 42

このようにして、Zoom によるオンライン学習では出てこなかった、対面だからこそ出てくる笑顔をいかに保障するかということに心を砕いてきました（Slide 43）。4～5 月の 2 カ月間は何もない時間やリモートの時間でしたが、6 月からはなるべく協働の学習を大事にしてきたことがご理解いただけるのではないかと思います。

Slide 43

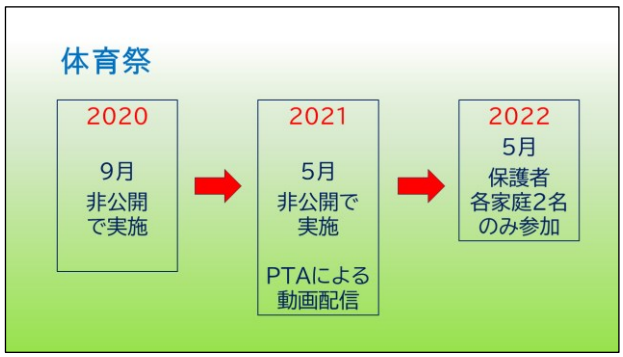
7. 学校行事

さすがに行事はなかなかすぐに復活とはなりませんでしたが、なるべく中止せず実施しようと、宿泊行事は 2020 年度の 5 年生以外は半年遅れでも実施しました（Slide 44）。コロナ禍を経て、10 月の実施は悪くないのではないかという話になり、その後、宿泊行事が 10 月に定着していきました。



Slide 44

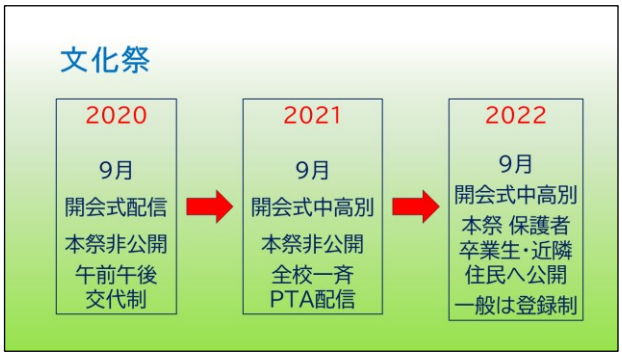
体育祭も、本来 5 月に実施するものを、文化祭と同じ時期に移してでも実施し、それから少しずつ公開範囲を広げて、2023 年度はフル公開で行いました（Slide 45）。



Slide 45

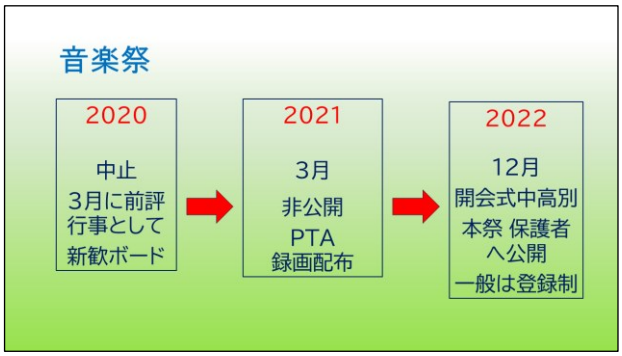
文化祭も、従来は全校が一堂に会していた開会式は集まることをやめて事前に撮ったものを配信して

いましたが、2021 年度には中高別に集まるようになり、現在では全校がまた体育館に集まって仲間の発表を共有する場になっています（Slide 46）。このように、公開できないまでも実施することを貫けたのは、本当に幸運なことだったと思います。



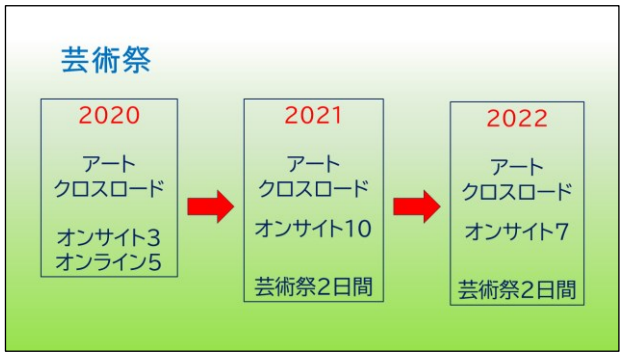
Slide 46

音楽祭は 1 度中止になってしまいましたが、徐々に復活しています（Slide 47）。



Slide 47

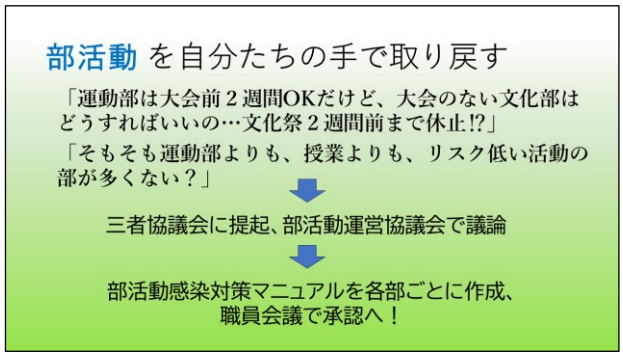
コロナ禍のもとで新たに生まれた行事もあります。2019 年度に東京大学芸術創造連携研究機構（ACUT）が発足した関係で、2020 年度には同機構のフェローの先生方をお招きし、「アート・クロスロード」と名付けて８つのプロジェクトを行いました（Slide 48）。その年度は教員主導でしたが、2021 年度には生徒主導の年間を通した活動になり、さらに同年 3 月末にはその結節点としての「芸術祭」を 2 日間開催することができました。



Slide 48

8. 部活動

部活動に関しては、緊急事態宣言の下、全国で活動が制限されていました。運動部は大会 2 週間前だけ OK というルールでしたが、「文化部はどうすればいいの？　そもそも、運動部よりも私たちの方がリスクは低くない？」という声が生徒たちから上がりました（Slide 49）。



Slide 49

恐らくこういう声は全国どこでも上がっていたのではないかと思いますが、私がすごく感動したのは、これをただの愚痴にとどめずに、教員・保護者・生徒の三者協議会に提起し、その後、部活動運営協議会で議論を重ね、部活動ごとに感染対策マニュアルを作成したことです。

教室では 40 人が声を出して話す協働・探究の授業を再開して久しいので、それよりもリスクが低い活動であれば再開しても問題はないのではないかという考えに基づき、各部活動で、教室の探究学習よりもリスクを下げるマニュアルを作成し、それを職員会議で承認するという手続きを経て、まだ全国的には緊急事態宣言の下で部活動が行われていなかったときに、東大附属では部活動を再開しました。

探究的･協働的な学びによって育まれた市民性がここで発揮されたのではないかと、生徒の姿にすごく感動すると同時に、附属の実践で掲げてきた方向性に確信を得たできごとでした（Slide 50）。

Slide 50

（北村）　淺川先生、ありがとうございました。コロナ禍以降の学校の対応や先生方のさまざまな工夫がよく伝わってきましたし、それに対して生徒たちも自分たちで考え行動してという、非常に東大附属らしい時間があったことがよく理解できました。

座談会　生徒と教師と語り明かす学びの変化

大井　和彦（教育学部附属中等学校教諭）

野々村まこ（東大附属在校生 73 回生）

髙濱　真帰（東大附属在校生 73 回生）

永利　美彩（東大附属在校生 74 回生）

コーディネーター：

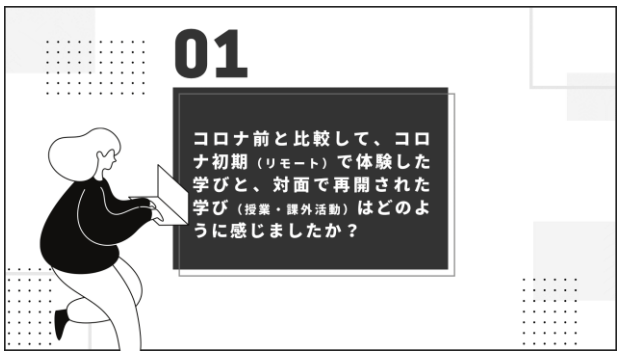
北村　友人（CASEER センター長・教育学研究科教授）

注. 質問者の匿名性を保つため、各質問者に対して質問者 1.2...という番号を付与した（同じ質問者の場合には同じ番号を付与している）。

（北村）　ここから、東大附属の 3 名の生徒と大井先生の座談会を始めたいと思います。事前にたくさんの質問を頂戴しているので、共通した要素を持った質問をグループ化し、私の方から皆さんに投げかけたいと思います。生の声を聞くというのが、この座談会の趣旨です。

質問 01　コロナ前と比較して、コロナ初期（リモート）で体験した学びと、対面で再開された学び（授業・課外活動）などのように感じましたか？

（北村）　まず多くの質問があったのが、コロナ禍前と比較して、コロナ禍初期のリモートでの学習や、対面再開後の授業や課外活動をどのように感じたかということです（Slide1）。



Slide 1

これはまず生徒たちに伺ってみたいと思います。野々村さん、髙濱さん、永利さんの順番でよろしいですか。

（野々村）　野々村と申します。アートクロスロードの実行委員会の委員長を 2 年間務めていました。今は高校 3 年生です。

コロナ禍初期の Zoom 等を使った学習では、やはり顔が見えず、ジェスチャーや相槌もない分、聞いてもらえているのか分からないような感じがしました。ビデオをオフにしていたりミュートにしている人が多く、反応が返ってこないので、話しているのだけれども話していないという感じはすごくあったと思います。

分散登校でもあっても学校での対面が再開されると、前にいる人が相槌を打ってくれたり、表情があることで、聞いてもらっている感じがして、Zoom のときにはなかった授業に対する集中力もあったように思います。

（髙濱）　髙濱真帰です。よろしくお願いします。やはりコロナ禍初期のリモート授業では、こちらが何をしていてもカメラをオフにしておけばバレないということもあり、なかなか身が入らず、その結果、課題提出率の低さを自分でも実感して、なかなか提出できていないと思うことが多かったです。

学校に行って授業に参加するようになると、みんなで協力したり、対面でしかない雰囲気があることによって、授業に身が入り、どんどん学んでいくぞという気持ちが高まっていったと思います。

（永利）　永利です。リモート授業では、やはりカメラをオフにしている子やミュートにしている子がほとんどで、みんなの顔が見えず、声も聞けなかったので、学校で対面が再開されたときには、みんなが他の子たちとの壁を感じていると思いました。

リモートの間は自分のクラス以外の子との関わりがほとんどなく、縦の関わりもなかったので、部活が再開されたときも後輩との接し方に困ってしまったり、先輩とどうやってコミュニケーションを取っていたか忘れてしまったわけではないけれども、ど

うしたらいいのか分からないことが多かったので、そこは個人的に大きな変化だったと思います。

（北村）　最初にご紹介を忘れましたが、野々村さんと髙濱さんが高校 3 年生で、永利さんが高校 2 年生です。皆さんいずれも精神的なところに言及されて、リモートのときの難しさと同時に、対面が再開したからといってすぐに何でもスムーズにいったわけではなく、通常であれば廊下で会うような他のクラスの子との出会いや部活動の上下のつながりなどで難しさを感じたということでした。

次に、先生の立場からご意見を頂きたいと思います。オンラインを一気に導入し、そこから分散登校、そして登校と、実は世界的に見ると日本は比較的短期間でオンラインの時期を終えて対面に戻すことができたのですが、そこには現場の先生方の並々ならぬ努力があったと思います。大井先生は、先生の立場からご覧になって、コロナ禍前と比較していかがでしたか。

（大井）　教員の大井と申します。よろしくお願いします。私は 2021 年度から生徒指導主事を務めており、その立場で生徒会と関わったりしています。

ちょうど GIGA スクール構想が 2020 年度から始まるというタイミングでコロナ禍になったので、それに合わせて本校は Google Classroom を導入し、さらに東大が Zoom のアカウントをわれわれ教員にも開放してくれたおかげで、かなりスムーズにオンラインでの学習を開始することができたと思います。ただ、もちろん最初は戸惑いがありました。

他の学校に比べて 6 月の対面再開というのは非常に早かったのではないかと思いますが、5 月に Zoom を使った授業をしながら、それを使うことが目的化してはいけないという気持ちは教員側には確かにありました。しかし、実際に慣れるのは生徒の方が絶対に早いという世代の問題はあったと思います。

2020 年度は、私は 1 年生と 4 年生の授業を持ち、どちらも Zoom で授業をしたのですが、4 年生ではブレークアウトセッションに分けたときに、教室では絶対に話していたメンバーが全く話さないという現象が起きていました。それは対面が再開してから聞いたのですが、やはり話しづらかったそうです。何が話しづらいかというと、もちろんカメラがオフで画面が暗くなっていることもあるのですが、周りの班の声が聞こえないことが不安で仕方なかったという声を数人の生徒から聞きました。グループで協働して課題を解いているときに、他の班の話している内容が情報として入ってくることは非常に重要だそうです。そういう意味で、コロナ禍前の対面のときは、物理的には少し距離があるけれども身体的にはつながっている関係性がすごくあったのだと思います。

一方で、1 年生は入学式がなかったので、授業で初めてお互いに会うという状態だったのですが、ものすごくチャットに書き込んできた学年でした。勝手に会話を始めて、しかもタメロで、文字がたくさん並んでいくという状態でした。

そういう世代の違いも感じつつ、やはりパーソナルなところでの協働のしづらさや分断が、先ほど淺川先生がおっしゃった本当の協働をしたいと感じ始めたところにつながったのではないかと思います。

（北村）　今、大井先生から非常に大事なポイントを三つ頂いたと思います。一つ目は、オンラインの活用が目的化してしまうこととどう向き合うか。実は事前に頂いた質問の中でも、「オンラインの積極的な活用に水を差すつもりはないけれども、ともするとオンラインの利用が目的化してしまっている授業も散見されるのではないか」という指摘を頂いており、オンラインにおいてもやはり生徒同士、または生徒と先生との関係性をつくり上げることが大事ではないかということだと思います。

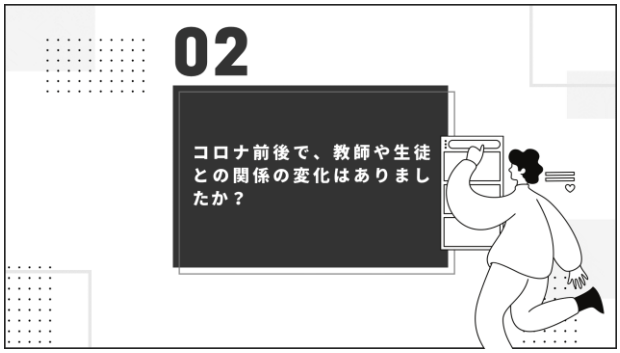
2 点目に非常に興味深いコメントだと思ったのが、身体的につながっている関係性です。議論のときに周りの声がないと不安というのは、とても目を開かされるコメントでした。単純にグループで議論する

場があればいいというわけではなく、そのグループ以外のグループもあって初めて教室という場が成り立つというのは、当たり前のことなのかもしれませんが、なかなか気付かない視点ではないかと思います。

三つ目は、どのように協働を考えていくかということに関して、先ほどの淺川先生のお話も踏まえながら、非常に重要なご指摘を頂いたと思います。

質問 02　コロナ前後で、教師や生徒との関係の変化はありましたか？

（北村）　今の皆さんのコメント、あるいは事前に頂いた質問でも結構出ていたことなのですが、教師と生徒の関係性、あるいは生徒同士の関係性が、コロナ禍の前後でどう変化したのかということについて、もう少し深掘りしたいと思います (Slide2)。先ほど生徒の皆さんからは、ご自身が感じたことを話していただきましたが、次に伺いたいのは他の生徒や先生との関係性です。



Slide 2

ここで大井先生の先ほどのコメントが興味深かったのは、世代の違いです。発達段階の違いもあるでしょうし、新入生なのか、あるいはそうではなく既に関係性ができていたのか等、いろいろな条件があるので、学年によっても、個々の生徒によっても違いはあると思いますが、コロナ禍を全て経験した高校 2〜3 年生の皆さんがどのように関係性の変化を感じたか、お話しいただけますか。

（野々村）　先生との関わりでいうと、Classroom や Gmail などのオンライン上での連絡が増えたので、普段は対面で確認していた連絡事項やホームルームで配られていた手紙も Classroom 上でやりとりすることが増えて、直接的な関わりは少し減ったと思いますが、そんなに先生との距離が離れてしまったという感じは私はなかったです。

友人との関わりという面では、私たちの学年は中学 2〜3 年生のときがコロナ禍で、先にある程度の関係性ができてからのオンライン授業だったので、対面が再開した後も、元々仲が良かった子とは話せましたけれども、行事が減った分、クラスで団結することが少なくなってしまい、1〜2 年生のときと比べると 3 年生のときは、クラスみんなで仲がいいという雰囲気は少なかったかなと思います。

あと、学年で動くことはあっても、部活動が減り、行事も学年でしかできず、他学年と一緒に何かをすることがなかったので、後輩・先輩とは関わりと言えるほどのことができず、距離が離れてしまったかなと思います。

（髙濱）　2 年生から 3 年生になるタイミングでクラス替えが行われたのですが、そのときはコロナ明けでマスクが義務化されて、クラスの全員がマスクを着けていたので、マスク 1 枚の壁みたいなものは気持ち的にかなりありました。今年の初めに学校でマスクを外しても大丈夫になって、そのときに初めて同級生の顔を見たという状態で、やはり当時はマスクの壁によって関係性に少し溝ができていたかなと思います。

部活の面では、入部した後輩と僕たちが 1 年間の部活を通して関係性を築いてきた中でコロナ禍になり、半年ぐらい部活ができず、関係性がリセットされてしまって、関係性の再構築には時間がかかったと感じます。

（永利）　先生とやりとりをする上では Classroom やメールが使われましたが、やはり文章だと対面と違って感情が載らないので暗い感じがして、話すのに

緊張することもありました。

私の場合は1年生の1年間でやっと関係が構築されて、いざ2年生の1年間でみんなで楽しもうというときにコロナ禍になってしまい、特に二つのグループに分かれたときに、グループが違う子とは全く会う機会がなくなってしまいました。関係性が構築されている途中だったので、一斉登校になったときに久しぶりに会っても接し方が難しかったし、壁のようなものを感じました。ただ、先生はその壁をどうにかしようとしてくれている感じがして、先生との距離は離れていなかったのかなと感じます。

（北村）　それぞれ関係性に関する非常にリアルな感想を頂きました。野々村さんは「特に他学年の子たちとの関係性で非常に難しさがあった」、髙濱さんは「マスクの壁」、永利さんは「文章には感情が載せづらい」という、いずれもなるほどと思うコメントでした。

今のコメントを踏まえて、大井先生はどのように感じましたか。

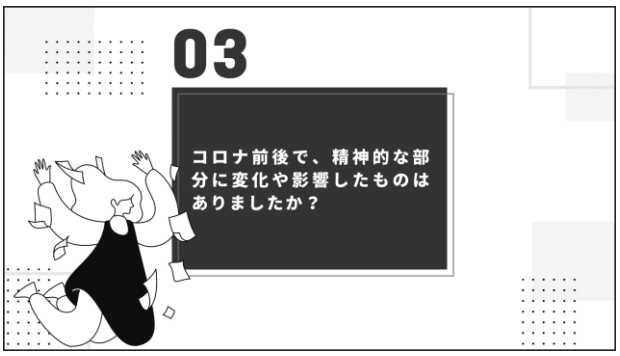
（大井）　教員と生徒の関係性に関しては、当時は生徒や保護者のみならず、われわれ教員も自分の生活や家族を考えたら不安で仕方がなかったですし、どうしたらいいのだろうという不安定感が顕在化していたので、生徒との間でお互いにどうしたらいいかという暗中模索感がものすごくあったのではないかと思います。

生徒同士の距離感に関しては、物理的につながれないということもそうですし、例えばLINEでつながっている友達もいたでしょうけれども、何かあって「大丈夫？」とLINEで聞いても「大丈夫」と返ってくるけれども、本当に大丈夫なのかという感じで、まさに永利さんが言っていたように、文字だけだと分からないということがやはりあったのではないかと思います。

身体的な分断はあって、実際に私も、そのとき持っていた学年の何人かからClassroomで個人的に「先生と話がしたいです」というメールが来て、たわいもない話を文通のようにしたこともありました。

質問03　コロナ前後で、精神的な部分に変化や影響したものはありましたか？

（北村）　先生がご指摘されたように、みんなが非常に不安を感じた時期だったと思います。あるいは先ほど日高先生の話の中で、体力低下等が見られたのではないかという話もありましたが、精神的な面と身体的な面、どちらでも結構です。コロナ禍前と比べてどのような変化を感じましたか（Slide3）。



Slide 3

（野々村）　精神的な部分でいうと、コロナ禍前は対面で話す分、話し方や態度に気を付けなければいけないという意識がすごくあったのですが、コロナ禍のときは友人も含め、人と直接的に関わることが少なくなったことで、むしろコミュニケーションが難しいという意識は少し減ったかなと思います。反面、やはりコミュニケーションの回数が減ると、どうやって話せばいいんだっけとか、どう言えば言いたいことのニュアンスが伝わるのだろうというのが分からなくなった部分はあって、コミュニケーションが減った分、良かった点もあれば、迷いのようなものもあったかなと思います。ただ、私の場合は一人で孤独だと思うことは特になく、むしろ一人の時間が増えて、考えをまとめたりリフレッシュする時間ができたかなと思います。

身体的な変化でいうと、やはりステイホームやおうち時間というのがすごく言われて、家でできる運

動というのも言われていましたけれども、実際、家にいるとだらだらしてしまって、運動する機会が元々多かったわけではないですが極端に減ってしまったと思います。体育の活動も、マスクを外せないので激しい運動はしづらくて、自分でも運動能力の低下は感じました。

（髙濱）　僕もあまり一人時間が苦しいタイプではないのですが、コロナ禍になって自宅で過ごす期間が長くなると、一人時間が好きといっても、やはり人と会いたいという思いがだんだん強くなっていって、孤独感は結構感じました。

身体的な部分でいうと、部活動がなくなって、いわゆるコロナ太りしてしまって、体重が結構増えてしまったのです。コロナ禍が明けた後も思うように体が動かなくて、体力や身体能力の低下はかなり感じました。

コロナ明けの初回の体育が、人と密にならないように、短縄の縄跳びの授業だったのです。それもマスクをしながらだったので苦しくて、先生方が工夫してくださった体育だったと思うのですけれども、生徒からすると、そこまで楽しい体育ではなかったかなというのが思い出に残っています。

（永利）　私も先輩方と同じように一人の時間はそこまで苦ではないです。もちろん学校は大好きですし、行きたいとは思っていましたが、家族との時間が増えていたので、そこまで一人という感じもなく、孤独に過ごすことはなかったです。ただ、やはり学校が始まると、同級生と壁ができていて、話しかけるのに勇気が必要で、話しかけるたびに顔をうかがって、返ってくる返事を待ってという感じで、コロナ禍前には感じなかったストレスではありませんが、そういうものを感じました。

身体的な変化でいうと、私は部活も結構がっつりやっていて、体育の授業も大好きだったので、コロナ禍になって部活がなくなり、体育の授業も家の中でできるストレッチや新聞紙を敷く競争みたいなものをリモートでやるしかなくて、運動量が一気に減って、体力はなくなったように感じます。

（北村）　個人的な話ですが、私には高校1年生の娘がいて、娘や娘の周りの子たちを見ていても、今皆さんが言ったことと同じようなことを思っていたのではないかと感じます。中高生は忙しいので、少し一人の時間ができると、それはそれで良いという面は確かにあったと思いますが、ずっと一人でいると、やはり友達と会いたいとか、いろいろなコミュニケーションの量を増やしたいと感じることもあったのだろうと思います。

運動とマスクの問題は、少し忘れてしまっていましたが、確かに非常に大きい問題でした。あの時期は部活動でも必ずマスクをして、運動部の大会でもマスクをしなければいけないといわれて、では吹奏楽部やコーラス部はどうすればいいのだという形で、皆さんの生活を直撃した問題だったことを思い出しました。

大井先生は、先生の立場から生徒たちを見ていていかがでしょうか。あるいは、先生の精神的なストレスに触れてもいいかと思います。

（大井）　われわれのストレスは正直あったと思います。どこかにぶつけることもできませんでした。

生徒の精神的な部分への影響については、東大附属生は比較的、部活動に代表されるような授業外の活動が好きな生徒が多いので、それができなくなったことによる精神的な影響はあったのだろう思います。

部活動に関しては、運動部の公式戦は2020年度はほぼなかったですが、2021年度に向けて公式戦という名の下に練習が少しずつ再開されました。一方で、本校の文化部は、コンクールや公式戦への参加を活動の主としない部も多く、文化祭「銀杏祭」が文化部の発表の場として設けられている側面もあったので、「文化祭に向けた活動もできないの？」という声は耳に入っていました。私は、18歳成人が2022年度

から始まる前段階で緊急事態宣言が出て、結局何もできないという虚無感に襲われた生徒たちを個人的にすごく気にかけていたこともあって、教室で協働の授業を行うよりよほどリスクが低い部活動もあるという議論が三者協議会で出てきたときに、どんどんやれという感じでサポートしていました。

実際に 2020 年度の高校 3 年生の中には、部活動をきちんと終えられなかったことにとても悩んだ生徒もいました。私が持っている陸上部の生徒も、頭では仕方がないと分かっているけれども、自分の中でどう処理すればいいか分からないと相談してきて、何度か Zoom で話したことがあります。活動をきちんと終えられなかったことに対してどう向き合うかというのは、本人たちにとって、その後の生き方にも関わるような重大な問題で、精神的な部分への影響はとてもあったのではないかと思います。

（北村）　学校生活や学校文化が揺り動かされる中で、生徒たちは非常に制約を受けながらも、自分たちで考えようとし、しかし、なかなかうまくいかないことや、自分たちの力だけではどうしようもないことに直面し、非常にもがいていた様子がうかがえました。

質問 04　コロナ禍でしかできなかった学びはありましたか？

（北村）　ここまでは少し大変だった話が続きましたが、一人の時間は良かったという話もありました。事前に頂いた質問の中でも、「コロナ禍でしかできなかった学びはありましたか」という、ちょっとポジティブに捉えるような質問を結構頂いていました（Slide4）。

Slide 4

ここで、チャットの方にも二つ質問が来ています。

質問者 5：3 名の生徒の皆さんに質問したいのですが、コロナ禍でのオンライン・オンデマンドの学びについて「学んでいる」という実感はありましたか。私は 2011 年の東日本大震災で被災して 1 カ月近く学校に行けない状態でした。ひたすらワークブックをこなすだけで、勉強をしている感じはなく、新しい知識が身に付いた気にもなりませんでした。皆さんは、コロナ禍で勉強のモチベーションをどう維持されていましたか。また、コロナ禍では、学ぶことの楽しさや面白さをどれくらい感じていましたか。

永利：全く授業がなかった期間に比べて Zoom の授業が始まったときは、勉強している、授業を受けているという実感はありましたが、モチベーションの維持はすごく難しかったです。みんなで Zoom によって授業ができるようになったことが私はうれしかったので、それがモチベーションの維持につながりました。

野々村：「学んでいる」という感覚がなかった、とは思いませんが、対面で学ぶことに比べると「学んでいるという感覚」が薄かったように思います。課題等への義務感を含む意欲は対面に比べあまりなかったためにそのように感じたのではないかと考えています。しかしながら、「課題をやる」という行動に対するモチベーションは高まったように感じています。対面での授業があれば成績等も授業を受ける姿勢で示せていましたが、コロナ禍では学習への意欲を課題を提出するという形でしか示すことができなかっ

たので、課題を提出することへの意欲は強まったように思います。

髙濱：正直あまりなかったように思います。リモート授業にもとりあえず出ておけばいいというような雰囲気が友人間でもありました。誰にも見られない空間での学習は自分には合わなかったです。その中でも各教科の先生方が工夫した授業を作ってくださったので、それらは参加へのモチベーションにつながったかなと思います。

質問者 6：興味深いご発表ありがとうございます！Remote learning の影響や他の方々の顔を見たり声を聞けないことについて、科目ごとに類似しているのか、異なっているのかについてご説明いただければと思います。

淺川：探究的課題をリモートで提示する難しさは、教科によってかなり違いがあったかとは思いますが、協働の側面・声も顔も画面の中の記号になってしまうという困難さは、教科にかかわらず共通していたように思います。

（北村）　一つ目は、生徒の皆さんはコロナ禍での学びで「学んでいる」という実感や学ぶことの楽しさ、面白さを感じていましたか、勉強のモチベーションをどう維持しましたかという質問です。

二つ目は、教科や活動によって影響に違いはありましたかという質問です。こちらは、教科によってはコロナ禍のいい影響もあったということもあれば、ご紹介いただければと思います。

少しポジティブに捉えたときに、コロナ禍だからこそできたと言えるような学びがあったかどうか、いかがでしょうか。

（野々村）　コロナ禍でしか得られなかった学びは 2 点あると思います。1 点目は、Zoom の使い方や、Google スライドなどで共同編集する方法です。授業内でこれらを使う機会が増えた分、使い方を教えてもらう時間もできて、家に持ち帰ってもオンライン上で一緒に作業ができるようになりました。コロナ禍でなかったら、こんなに急速に当たり前のように使えるようにはならなかっただろうと思います。

2 点目に、芸術祭では講演会やワークショップなどを開催したのですが、そのときに実行委員会で感染拡大防止の対策を考えなければいけなかったので、そういう対策を考えることも、コロナ禍でなければできなかったことだと思います。また、文化祭は前の年にも実施したので毎年同じことの繰り返しでできるのですが、芸術祭で感染拡大防止対策を考える機会を得たことで、文化祭などにおいても、接触を減らすための人員削減や本当に必要なことなどについて考え直すきっかけになりました。

各教科で影響が類似していたかという点については、私は強いて言えば特に体育でやりづらさを感じていましたが、どの教科も等しくオンラインだとやりづらさを感じていました。リアルタイムで添削をしてもらえたとしても、言葉が機械から発せられると記号っぽいというか、あまり頭に入ってこなくて、それこそ学んでいるという実感が薄かったかなと思います。

（髙濱）　やはりネット環境の充実という点で結構学びがあったと思います。コロナ禍によって Zoom が普及したことで、外部講師に直接来てもらわなくても、Zoom をつないでやりとりをして学習を深めることができました。

また、本校は卒業研究というものがあって、1 年以上の時間をかけて研究をするのです。その中で、僕は全国幾つかの場所に実際に伺ってインタビューする調査が多かったのですが、現地に行くだけではなく、Zoom をつないでインタビューをすることも多かったです。コロナ禍がなかったら相手の Zoom の環境もなかなか整わなかったと思うので、Zoom や Classroom などが普及したことによって、遠く離れた人との関わりの中での学びが増えたと思います。

（永利）　小学校のときはZoomを使うことが全くなかったので、それを利用する機会ができて、このシンポジウムのように活用することもできますし、遠くの人とつながりたいときも、私は親戚と話すのにツールを使ったことがあって役に立ちました。もちろん距離は感じますが、距離を感じるなりの学び方や、相手と関わるツールの活用方法をコロナ禍で学ぶことができたと感じます。

（北村）　皆さんそれぞれ技術を活用しながら、その場に応じてうまく対応されたのだと感じました。

大井先生は、コロナ禍の中での学びに関して、いかがでしたか。

（大井）　担任をしていた生徒からは、苦手な教科を自分のペースで改めて学べたという話を聞きました。本校は、6月はクラスの半分が1日置きに登校していて、それは3カ月間学校に来ていなかったので慣らしも含めてそうしていたのですが、そのときに、自分があまりできないと思っている教科の勉強をじっくりやることができたと聞きました。

個人的には、別にコロナ禍でしかできなかったことではないかもしれませんが、いわゆる反転学習的な感覚で授業をするのは、すごくやりやすかったと思います。会ってできることが時間的にも限定されていたので、やっておいてほしいことをClassroomで配信しておいて、それを前提に授業を進めることができたのではないかと思います。

（北村）　国際比較すると日本の中高生は学校のスケジュールが忙しくて、人それぞれ違いもある中で、どのようにうまく自分の学びのペースを確保するかというのは、確かにコロナ禍だったからこそ考えられた部分があったのかもしれません。学びのペースについては、ウィズコロナの時代においても考え続けなければいけないことではないかと思いました。

反転授業についても同様に、どのようにしてウィズコロナの時代の中でうまくやっていくのかというのは、今後の大きな課題ではないかと思います。

ここで、東京大学教育学部の教授で東大附属の活動にも長く関わられている小国先生に、今の話を聞いての感想を頂ければと思います。

（小国）　コロナ禍の下で、できたこととできなかったことがあることは恐らく事実だと思います。うまく対応できた人と、うまく対応できなかった人がいるということも言えると思いますが、全国的にはやはり不登校の数が一気に増えたわけですから、コロナ禍が弱者に非常に大きな影響を与えたという部分をどう評価するのかという問題があるように思っています。

アメリカなどでもそうだと思いますが、オンライン授業にうまく対応できた子どもは、お母さんが横に付いていたり、家庭条件が比較的良い子どもであるという話があります。ですから、東大附属の生徒たちの中にもいろいろな家庭状況がある中で、どういう子たちが影響を被ったのか教えていただけたらありがたいと思います。今後の学校教育にオンラインをどのぐらい取り入れていくのか考えるときに、恐らくその辺の問題がすごくシビアな話として出てくるのではないかと思っています。

（北村）　今日の3名の生徒の話や、先ほどの調査結果から、基本的に東大附属ではうまく対応した子がかなり多かったのではないかと思いますが、中にはやはり少し難しい状況にあった子たちもいたのではないかと推測されます。この点について、大井先生からご覧になっていかがでしたか。

（大井）　先ほど山本校長から話があったように、保健室の来室者数が後から増えたという状況もありますし、オンラインだと、いわゆるハンドルの遊びのような部分が全くないので、どうしても息が詰まるという状態はお互いにあったと思います。われわれもそうですし、生徒の皆さんにもあったと思うのです。

やはり教室だと、授業検討会で各班の活動を録画したビデオを見ていると、撮られていることを気にしないぐらい他の子と話をしている様子があって、われわれもこれが授業だというふうに思いますし、別にそれをコントロールしようとも思いません。むしろ協働の場合は、そういう息抜きといいますか、グループで話す段階、クラスで話す段階、個人で考える段階というふうに差異化されていることにすごく意味があるのではないかと思います。

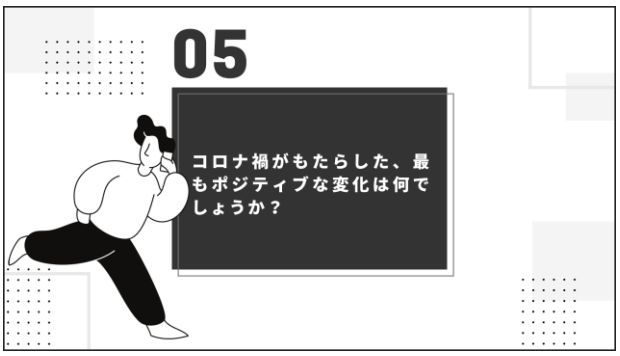
オンラインだと、ブレークアウトセッションでグループになったところで、身体的には分離されているので、グループ段階というよりも個人の段階に近くなってしまい、みんなで取り組んでいるという感覚を持ちづらい気がします。

これは憶測ですが、勉強が難しい子ほど教室にいられる時間がプラスに影響していたのであれば、オンラインになって話すらできない、勉強するしかないという息苦しさはあったのではないかと思います。

（北村）　東大附属の場合は比較的うまく対応した生徒が多かったのではないかと想像しますが、その中でもやはり難しさがあることを考えると、さまざまな学校において、うまく対応できた子とそうでない子の二極化の問題が出てきているのではないか。しかも、すぐにその影響が出るというよりは、少し時間を置いて出てくるとすると、状況が大変なときには困っている子に対して「大変だよね」と心を寄せやすいのですが、日常が戻ってきた中で遅れて問題が出てくると「まだそんなことを言っているの？」という感じになってしまい、難しさや苦しさを抱えている子にうまく寄り添えない状況も生まれるのかもしれないと感じました。

質問 05　コロナ禍がもたらした、最もポジティブな変化は何でしょうか？

（北村）　最後に、登壇してくださった皆さんから一言ずつ頂ければと思います。例えば、コロナ禍がもたらした最もポジティブな変化でもいいですし、この経験を生かして今後どんなことを考えていきたいかということでも結構です（Slide5）。



Slide 5

（野々村）　コロナ禍の前後で、どこかで変化を感じていたかもしれないけれども、あまり強くは感じていなかったのですが、今回、コロナ禍前とコロナ禍中、そしてほぼ回復してきた今を比べてみて、あのときはこうだったなと思い出すことができました。今振り返ると、私は一人時間を有効活用できるようになった点が一番良かったと思っているのですが、家で一人で楽しんでいたような趣味、例えばコロナ禍でアニメがすごく広まりましたが、そういうものが友人と共有できる話題になった点も、コロナ禍がもたらした良い点だったと思います。

このシンポジウムに参加させていただくことで、そういうことを振り返ることができたので、すごく良い機会だったと思いますし、有意義な時間を過ごすことができました。本当にありがとうございました。

（髙濱）　この座談会の打ち合わせの時点で、コロナ禍がもたらしたポジティブな変化は何かあったかと聞かれて、ここ数日間考えたのですが、やはりなかなか見つかりませんでした。コロナ禍でいろいろな行事が中止になったり、僕自身、応援団長をやる直前に新型コロナウイルス感染症にかかってしまって当日出られなかったり、やはり苦しい思い出が多くて、ポジティブな面がなかなか見つかりませんでした。ただ、コロナ禍で人との当たり前の関わりが

なくなってしまったので、コロナ禍が明けて人と関わっていく中で、人との関わりの温かさやありがたさを改めて実感できた点は良かったかなと思います。今日はありがとうございました。

（永利）　コロナ禍を振り返ってポジティブな変化を考えてみたのですが、私は学校に行きたいと思うようになりました。別に学校が嫌いだったわけではないですし、大好きでしたけれども、中学校 1 年生のときは「明日ちょっと行きたくないかも」とか、「あ、明日、数学がある」とか、いろいろ感じる部分がありました。しかし、人と関わらなくなって、クラスの子ともちゃんと会えなくなって Zoom だけとなったときに、自分は友達と関わるのが好きだとか、学校がすごく好きだと思うことが増えました。

コロナ禍の期間が、自分が学校に対してどう思っているのかということを知る時間になったので、もちろんマイナスなことも多かったですけれども、今振り返ってみるとそこはポジティブな変化なのかなと感じます。今日はありがとうございました。

（大井）　オンラインと対面を両方できる状態になって、本当に大切なものは何なのか、それをどう大切にするのかとか、対面でしかできないこともあるとか、いろいろなことを感じました。

本校の教員は、総合的な学習や卒業研究をはじめとして、生徒を本物に出会わせたいという思いが強いと思うのです。私も茶道の授業で生徒を京都に連れていくことがあるのですが、やはりコロナ禍のときは行けませんでしたし、東京でも美術館などはものすごく制限をかけられて、本物を目にできないことの苦しさや負の影響を感じると同時に、本物に出会えることの貴重さに改めて気付くことができました。

一方で、コロナ禍を経て、人と会わないという選択肢も比較的許されるようになってきた結果、これは負の側面かもわかりませんが、休校がなくなるということもあったと思います。例えば学級閉鎖になるような状況のときに Classroom で課題を出すことが一般的になってきて、元気な子はそれをやるという状態なのです。それに対する良しあしについては生徒側にもいろいろと思いがあるのではないかと思いますが、お互いに苦しくならないようにというのは、これから考えていくことかなと思います。

コロナ禍のときに卒業した生徒たちが、「青春できないことが嫌だ」と言ったのです。普通その年代で青春という言葉は言わないと思うのですが、「ばかなことを思い切ってやれる年代は今しかないと改めて感じた」と言っていました。ですから、生徒たちに充実感を持たせるために、環境的な面も含めて、どのようにわれわれが関わっていくかというのは、これからも考えていかなければいけないのではないかと改めて思いました。今日はありがとうございました。

（北村）　生徒の皆さんや先生のお話を伺って、いろいろな思いが胸に湧いてきました。本当に心に刺さる言葉を今日はたくさん頂いたと思います。

探究や協働、本物を見せることを大事にする東大附属という学校においては、コロナ禍というのは本当に大きな障害だったと思いますが、その中でも皆さんが学びを止めなかったことが、ご視聴の皆さまにもすごく伝わったのではないかと思います。

コロナ禍のときに副校長という立場で非常にご苦労された淺川先生からも、最後に一言、感想を頂ければ思いますが、いかがですか。

（淺川）　都内の国立大学附属学校の副校長会でも、2020 年度、2021 年度と、これまで見なかったような深刻な事例が挙げられました。希死念慮にとらわれて自殺行為に及んだり、実際に亡くなった生徒がいる学校もあります。そういった深刻なケースは、まだまだこれからも予断を許しません。うまく過ごせなかった子たちに、教員側がどういう眼差しを向け、どういう手だてを用意するかということは、本当に大きな課題だと思っています。

一方で、私自身が ADHD なので、課題を締め切りまでに出せない子たちのことはずっと気にしてきたのですが、黒板に課題を書かれて締め切りまでに提出することに対応できずにこぼれてきた子たちが、デジタルデバイスが浸透したことで、スマホの中を見れば自分の未提出の課題が幾つあって、締め切りがいつなのかということをすぐに確認できるようになりました。そういった前進を大事にしながら、全ての子どもたちにとっていい学校環境をつくっていければと願っています。今日はどうもありがとうございました。

（北村）　うまくいかない生徒にどう手を差し伸べるか。また、技術をうまく使うことも大事だと改めて感じました。非常に実り多いディスカッション、座談会になったのではないかと思います。

先ほど永利さんが「学校に行きたくないと思っていた」と話したときに、どっと笑い声が聞こえてきたのですが、今、生徒の皆さんが永利さんと同じ部屋にいるのでしょうか。これはオンラインシンポジウムですが、実は皆さんはカメラの向こうで一緒の空間を共有していて、やはり画面越しに話しているのとは違う空気感があると感じました。大井先生も、隣のグループの声が聞こえるからこそ、その教室のコミュニティが成り立っているという話をされましたが、それを今日の座談会でもすごく感じることができて、先ほどの笑い声がとても印象的でした。やはり対面はいいなと思いながらも、うまくオンラインも活用して、新しい時代の学びの在り方を考えていければと思います。

これで座談会を終了としたいと思います。生徒の皆さん、先生方、ありがとうございました。

チャットによる討論

質問者７：私の高校ではコロナ禍の昼食は黙食だったため、対面授業が始まっても友人と関わる機会が少なかったのですが、協働性を重視している東大の附属学校ではコロナ禍でも昼食時に友人と関わることができるような対応はとっていたのでしょうか。また、その対応について良かったこと、不便だと思ったことなどはありましたか。

永利：私のクラスでは食べている間は黙食、自分と友達が食べ終わったらマスクを着用して友達のところに行っておしゃべりをしてもいいというルールでした。

質問者 8：苦手な教科をじっくり勉強できたというポジティブな側面もあり、そうした生徒は勉強の仕方を知っていてやる気があるから取り組めるのだと思います。一方で、苦手なことを徹底的に避ける生徒も出てきたと思うのですが、そうした二極化はありましたか。

淺川：リモートの 3 カ月では恐らく果てしなく拡大したと思いますが、その後の 3 年間でどこまで取り戻せたか…そこは検証できていません。

閉会挨拶

北村　友人（CASEER センター長・教育学研究科教授）

本日は休日にもかかわらず、朝からご参加いただきありがとうございました。ご視聴くださった皆さま、ご登壇いただいた皆さま、本当にありがとうございます。充実した議論ができたと感じています。

今回は東大附属という特殊な学校の事例を基にシンポジウムを開催しましたが、さまざまな学校においても参考にしていただけるような内容もあったのではないかと思います。これからも毎年、CASEER と東大附属の共催でシンポジウムを開催してまいりますので、引き続き皆さまのご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。最後に改めて、ご登壇いただいた皆さんにお礼を申し上げて、本日のシンポジウムを終了とさせていただきます。どうもありがとうございました。

シンポジウム

コロナ禍を通した主体的・探究的な学びの変化と今

―東大附属中等教育学校における新たな取り組みとその効果―

報告書

発　行　者：東京大学大学院教育学研究科附属　学校教育高度化・効果検証センター

（編集担当：北村友人、上野雄己、柴山笑凜）

発行者連絡先：〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

東京大学大学院教育学研究科赤門総合研究棟A212

c-kouka@p.u-tokyo.ac.jp

発　行　日：2024 年 3 月 31 日

CASEER

東京大学大学院教育学研究科附属

学校教育高度化・効果検証センター